



鹿児島大学キャンパスマスタープラン

Kagoshima University Campus Master Plan



この冊子の印刷には、従来のインキに含まれていた石油系溶剤の一部の代替として環境に配慮した大豆インキを使用しています。

お問合せ先

国立大学法人鹿児島大学施設部

TEL : 099-285-7220

E-mail : kkikaku1@kuas.kagoshima-u.ac.jp

URL : <http://www.kagoshima-u.ac.jp/>



創立50周年を記念して制定された。

KAGOSHIMAの頭文字「K」をデザインしたもので、今、まさに飛び立とうとしている姿を「鳳」の形にデザインし、歴史と伝統に輝く鹿児島大学のキャンパスを巣立つ卒業生が世界の舞台を翔ようとしている姿をシンボル化したものである。



国立大学法人鹿児島大学

はじめに INTRODUCTION

成長と変化を続ける国立大学において、教育・研究環境内容にふさわしい施設を整備し、ゆとりと潤いのあるキャンパスを形成する必要があり、そのために長期的な観点に立った秩序ある施設整備を進める必要がある。そのため、将来構想を想定しうる範囲において、段階的な整備を進めるための方向を示す施設計画を策定する必要がある。

これに基づき、法人化以前の国立大学キャンパスの施設計画は、文部科学省の指導のもと「国立大学施設長期計画書」を作成し、5年毎の見直しを行ってきた。

その後、平成16年度の国立大学法人化に伴い、各国立大学は自己責任のもと、新たな施設計画を策定することとなった。鹿児島大学では、施設長期計画書に替わるものとして、平成15年度に新たにキャンパスマスタープランを策定した。

本マスタープランは、平成15年度策定のキャンパスマスタープランを見直したものである。見直しにあたり、法人化後、第一期目の中期目標期間中の現在、国立大学の方向性を模索している現状を鑑み、既存マスタープランのビジュアル化等、軽微な変更を抑えている。また、本マスタープランは、概ね次期中期目標期間を見据えたものとしており、今後、国の方針、予算状況や大学の様々な教育研究内容の変化に伴い、変更される可能性がある。

目次 CONTENTS

キャンパス形成の基本的考え方

- 01 鹿児島大学の理念【大学憲章】
- 01 施設整備の基本理念

キャンパス概要

- 02 キャンパス位置図

郡元キャンパス

キャンパス概要

- 03 郡元キャンパス

キャンパスの現状

- 04 施設の現状～老朽化～
- 05 ～耐震化～
- 05 ～狭隘化～
- 06 ～整備状況～
- 07 動線の現状
- 08 駐車場・駐輪場の現状
- 09 緑地資源の現状
- 10 屋外環境の現状

キャンパス計画

- 11 ゾーニング計画
- 12 施設整備計画
- 13 動線計画
- 14 駐車場・駐輪場計画
- 15 緑地資源計画
- 16 屋外環境計画
- 17 地域社会に開かれたキャンパス計画
- 18 将来構想配置図
- 19 将来構想イメージ図

桜ヶ丘キャンパス

キャンパス概要

- 20 桜ヶ丘キャンパス

キャンパスの現状

- 21 施設の現状～老朽化～
- 22 ～耐震化～
- 22 ～狭隘化～
- 23 ～整備状況～
- 24 動線の現状
- 25 駐車場・駐輪場の現状
- 26 緑地資源・屋外環境の現状

キャンパス計画

- 27 ゾーニング計画
- 28 施設整備計画
- 29 動線計画
- 30 駐車場・駐輪場計画
- 31 緑地資源・屋外環境計画
- 32 将来構想配置図

下荒田キャンパス

キャンパス概要

- 33 下荒田キャンパス

キャンパスの現状

- 34 施設の現状～老朽化～
- 35 ～耐震化～
- 35 ～狭隘化～
- 36 ～整備状況～

キャンパス計画

- 37 ゾーニング計画
- 38 施設整備計画
- 39 将来構想配置図

その他の主要キャンパス

キャンパス概要

- 40 下伊敷キャンパス・牧園キャンパス

鹿児島大学の理念【大学憲章】

IDEA OF
KAGOSHIMA UNIVERSITY

施設整備の基本理念

IDEA OF
FACILITIES MAINTENANCE

鹿児島大学は、日本列島の南に位置し、アジアの諸地域に開かれ、海と火山と島々からなる豊かな自然環境に恵まれた地にある。この地は、我が国の変革と近代化を推進する過程で、多くの困難に果敢に挑戦する人材を育成してきた。このような地理的特性と教育的伝統を踏まえ、鹿児島大学は、学問の自由と多様性を堅持しつつ、自主自律と進取の精神を尊重し、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす。

教育

鹿児島大学は、学生の潜在能力の発見と適性の開花に努め、幅広い教養教育と高度な専門教育を行うとともに、地域の特性を活かした進取の気風を養う。

鹿児島大学は、真理を愛し、高い倫理性と社会性を備え、向上心を持って自ら困難に立ち向かい、国際社会で活躍しうる人材を育成する。

社会貢献

鹿児島大学は、南九州を中心とする地域の産業の振興、医療と福祉の充実、環境の保全、教育・文化の向上など、地域社会の発展と活性化に貢献する。

鹿児島大学は、アジアや太平洋諸国との連携を深め、研究者や学生の双方向交流および国際共同研究・教育を推進し、人類の福祉、世界平和の維持、地球環境の保全に貢献する。

研究

鹿児島大学は、個々の研究を重視するとともに、種々の学問分野における優れた研究者の連携により、21世紀を先導する研究者を育成する。

鹿児島大学は、地域の要請に応える研究を展開するとともに、普遍性を求める研究活動を推進し、世界水準の研究拠点をめざす。

大学運営

鹿児島大学は、学長のリーダーシップのもと、全構成員が運営に責任をもって参画することにより、教育研究環境の充実を図る。

鹿児島大学は、大学の自治を礎とし、常に自己点検・評価を行うとともに、外部からの意見を積極的に反映させ、透明性の高い公正な大学運営を行うことにより、社会への責任を果たす。

施設整備の基本理念

キャンパス空間は、変化を続ける教育研究とは異なり、時代を超えて大学の根幹として維持・継続されていくものである。鹿児島大学は「鹿児島大学の基本理念」に基づき、総合大学としての責務を持続的に果たすため、「知の創造と活用の拠点」を促すキャンパスを創造する。

施設整備の基本目標

個性的で開かれたキャンパス

鹿児島大学は、創設以来のキャンパス整備の変遷と、日本列島の南の玄関としての地理的特性を踏まえ、時代の変化や社会の要請に柔軟に変化・発展する個性あるキャンパスを創出する。また、開放的なキャンパスを創出して、学内及び地域社会との有機的連携を図る。

知の交流を促すキャンパス

鹿児島大学は、教職員と学生の教育研究活動の支援並びに学内及び地域社会との多様な知の交流に資するキャンパスの創出を目指す。

キャンパス計画のコンセプト

全学的協力による一体的整備

すべての土地及び施設を大学全体の共有財産としてとらえ、部局の自立性及び自発性を尊重しつつ、全学的な協力と合意に基づき、その整備を系統的かつ継続的に行う。

計画・管理・評価体制の確立

全学の土地及び施設を一体的に整備するための全学的な計画立案及び管理体制を強化し、確立する。土地及び施設整備の計画及び実施に対する点検評価の体制を備え、総合的な評価に基づきキャンパスマスタープランの更新と土地及び施設の充実を図る。

『知の創造と活用の拠点』を促すキャンパス

鹿児島大学は、高等教育・学術研究という国民から負託された知的公共的使命を果たすため、先進的・独創的な研究活動、診療、及び高度な教育実践に資するキャンパスの創出と活用を目指すとともに、機能性、安全性、快適性等その質の向上を図る。

これらの目標を達成するために、学生、教職員への意識啓発を図るとともに、「鹿児島大学における施設マネジメントに関する基本方針」及び「鹿児島大学における施設等の有効利用に関する基本方針」に基づき、施設の点検・評価を踏まえた施設の有効活用及び計画的な維持管理等、施設マネジメントを推進し、本学の教育研究活動に対応した施設設備、インフラストラクチャー、屋外環境等の計画的整備及び運営管理を一体的に行う。

土地・施設の弾力的な活用

すべての土地・施設を固定化することなく、弾力的に有効活用を図る。また部局を越えた汎用性及び流動性を有する施設を整備し、その有効かつ合理的な活用の推進を図る。

キャンパス位置図 POSITIONAL CHART IN CAMPUS

鹿児島県の概要

鹿児島県HP引用 <http://www.pref.kagoshima.jp/>

鹿児島県は日本の47都道府県の一つで、日本本土最南端にあります。総面積は9,187平方キロメートルで、薩摩半島、大隅半島の二つの半島と多くの離島を有し、18市、24町、4村の46市町村で構成されています。

鹿児島県は、かつては西洋の技術を取り入れた藩である島津藩の領地で「薩摩」と呼ばれていましたが、今でも薩摩という地名はなじまれています。当時の西洋文明を取り入れる努力が1868年の明治維新を推進し、それまでの封建制度を崩すことになりました。

鹿児島は、南に位置するという地理的条件を生かして、古くから中国や韓国、東南アジアをはじめとする世界の国・地域の文化と接しながら、本県独自の歴史や文化を作り上げてきています。

また、鹿児島県民の南国特有の

開放的で明るい気質

は、親切で親しみ

やすい人情を

生み、国内外と

の交流を拡大

する上で有利

な点となっ

ています。



鹿児島県は、南北600キロメートルに及ぶ温暖で広大な県土の中に、世界自然遺産に登録されている屋久島をはじめ特色ある島々、桜島等の火山、緑あふれる森林、豊富な温泉など、多彩で豊かな自然と個性ある歴史・文化などの観光資源に恵まれており、我が国数々の観光県です。

鹿児島県は、良質で豊富な農林水産物を産出するとともに、それらを活用した食品産業が集積しており、我が国の食糧供給基地としての役割を担っています。一方、県央地域を中心に、電子関連産業の集積と技術の高度化が進んでいます。

また、現代科学の粋を集めた宇宙ロケット打上施設を有する国内で唯一の県でもあります。

2004年3月には、九州新幹線鹿児島ルート鹿児島中央・八代間が開業し、鹿児島と博多間が約2時間10分で結ばれ（博多までの全線開業後は、約1時間20分の予定）、鹿児島への陸上アクセスも飛躍的に向上しました。

また、鹿児島空港は、南九州の拠点空港として、上海線、ソウル線の2つの定期国際航空路線を有するほか、東京、大阪等の国内主要都市や県内各離島と多くの路線で結ばれています。

このように、鹿児島県は、恵み豊かで多彩な自然環境や南に開かれた地理的な特性、個性ある歴史・文化、多様な産業や技術の集積、資質に富んだ人材など、豊かな可能性に満ちています。

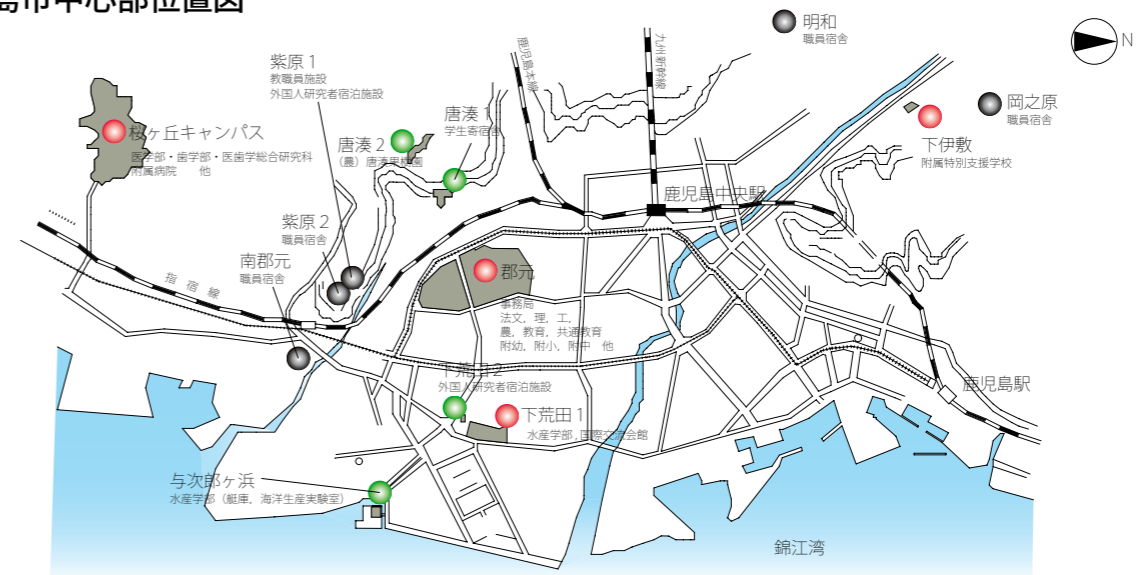
県内位置図

鹿児島大学は、8の学部、10の大学院研究科、12の学内共同教育研究施設等の他、附属病院、附属学校等多数の附属施設で構成され、県内に27のキャンパス（職員宿舎のみのキャンパスを含む）があります。

5の主要キャンパスのうち、4の主要キャンパスは鹿児島市に集中していますが、他のキャンパスは県内各地に散在しており、鹿児島県の多彩で豊かな自然資源を活かした教育・研究等が盛んに行われています。



鹿児島市中心部位置図



鹿児島大学は、鹿児島市中心部に13のキャンパス（職員宿舎のみのキャンパス含む）があり、郡元、桜ヶ丘、下荒田1、下伊敷の4の主要キャンパスがあります。

郡元キャンパスは、九州新幹線終着駅である鹿児島中央駅から徒歩約25分の場所にあり、鹿児島大学の基幹キャンパスとして教育研究の核を担っています。

桜ヶ丘キャンパスは、郡元キャンパスから車で約20分の場所にあり、医学・医療関連分野における教育研究及び医療の実践の拠点であることはもちろん、総合医療の医療機関及び特定機能病院として、高度先進医療・研究開発・救命救急等、南九州における中核的役割を担っています。

下荒田キャンパスは郡元キャンパスから徒歩約20分の場所にあり、郡元キャンパスと共に広義の郡元地区を形成しています。水産学を中心に水圏及び臨海域における教育研究機能と、国際交流会館を軸とする国際化の一躍を担っています。

郡元キャンパス OUTLINE OF KORIMOTO CAMPUS

郡元キャンパス概要 -平成19年5月現在-

- 設置年度：昭和24年
- 敷地面積：351,918㎡
- 建築面積：63,618㎡
- 延面積：187,130㎡
- 都市計画区域：都市計画区域内 市街化区域
- 防火地域：準防火地域
- 用途地域：第1種住居地域
準住居地域
近隣商業地域
- 都市計画施設：水道、下水道等供給施設又は処理施設
- 日影規制：5-3時間
- その他の地域：公害防止地域
(大気汚染、騒音、水質汚濁)
- 地震地域係数：3種
- 地盤種別：2種
- 積雪寒冷地域：その他

郡元キャンパスの位置付け

郡元キャンパスは、学部における共通教育・基礎教育、専門教育、教育実践や大学院教育など高等教育の基盤と基礎及び先端的・学際的研究を展開する教育研究の中心的存在であり、鹿児島大学のメインキャンパスとして、教育研究の核を担う。

郡元キャンパス配置図



平成20年2月撮影



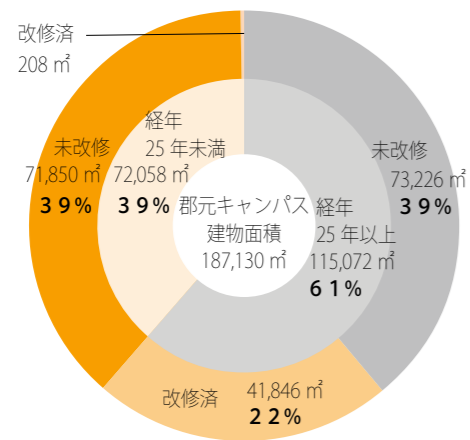
教育学部 (教育学研究科)	理学部 (理工学研究科)	学内共同利用施設等	福利厚生施設等	農学部
62 第一体育館	46 理学部1号館	43 稲盛会館	24 中央食堂	連合獣医学研究科
64 教育学部武道場	47 理学部2号館	57 中央図書館	51 大会館 (1・2・4号館)	(農学研究科)
65 教育学部体育科実験研究棟	48 理学部3号館	83 総合研究博物館 (常設展示棟)	52 大会館 (3号館)	連合農学研究科
66 教育学部管理棟・理系研究棟		45 総合研究博物館	61 課外活動共用施設	4 農学部共通管理棟
67 教育学部第一講義棟	工学部 (理工学研究科)	2 保健管理センター	82 課外活動共用施設	5 農学部研究棟A
69 教育学部第二講義棟	27 工学部機械工学科2号棟	3 埋蔵文化財調査室	86 郡元南食堂	6 農学部附属動物病院
生涯学習教育研究センター	28 工学部建築学科棟	40 産学官連携推進機構棟	共通教育	7 農学部研究棟C
70 教育学部文系研究棟	29 工学部電気電子工学科棟	49 理工系総合研究棟	53 共通教育棟1号館・教育センター	8 農学部研究棟E
71 教育学部音楽美術科棟	31 工学部機械工学科1号棟	50 学術情報基盤センター	54 共通教育棟2号館	9 農学部研究棟D
72 教育学部附属教育実践総合センター	32 工学部応用化学工学科1号棟	87 総合教育研究棟 (多島園研究センター)	55 共通教育棟3号館	10 共同利用棟
74 教育学部附属幼稚園	34 工学部応用化学工学科2号棟	12 フォブ/アライノ研究推進センター	留学生センター	11 農学部研究棟B
75 教育学部附属中学校	37 工学部海洋土木工学科棟	90 稲盛アカデミー棟	56 共通教育棟4号館	13 R1実験施設
76 教育学部附属中学校体育館	38 工学部情報工学科棟	法文学部 (人文社会科学研究科)	63 第二体育館	84 大学院連合農学研究科棟
77 教育学部附属小学校	39 工学部共通棟	司法政策研究科 (法科大学院)	事務局	89 焼酎学講座研究棟
78 教育学部附属小学校体育館	42 工学部管理棟	臨床心理学研究科 (専門職大学院)	1 事務局	
		59 法文学部1号館	A インフォメーションセンター	
		60 法文学部2号館		
		87 法文学部3号館		
		87 総合教育研究棟		

施設の現状 THE CURRENT FACILITIES OF KORIMOTO CAMPUS

老朽化の現状 -平成19年5月現在-

郡元キャンパスの全建物面積 187,130 m²のうち、経年25年以上の建物面積が 115,072 m²であり、約61%を占めている。これらの経年25年以上の建物のうち、未改修の建物面積は 73,226 m²であり全建物面積の約39%となっている。

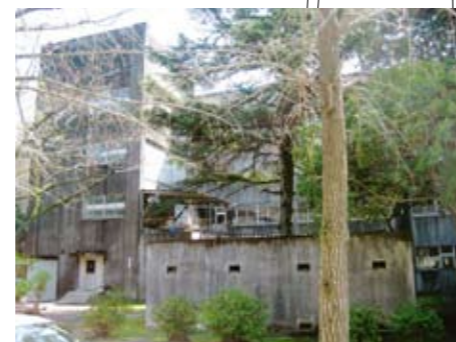
経年劣化の最も著しかった農学部エリアがPF1事業により順次改修されており、老朽施設の再生は進んでいるが、まだまだ老朽施設は残っており、教育研究基盤施設の再生に向け、今後もこれらの老朽施設の再生は重要な課題である。



教育学部第2講義棟



共通教育棟3号館



大学会館2・4号館



応用化学工学科1号棟



キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

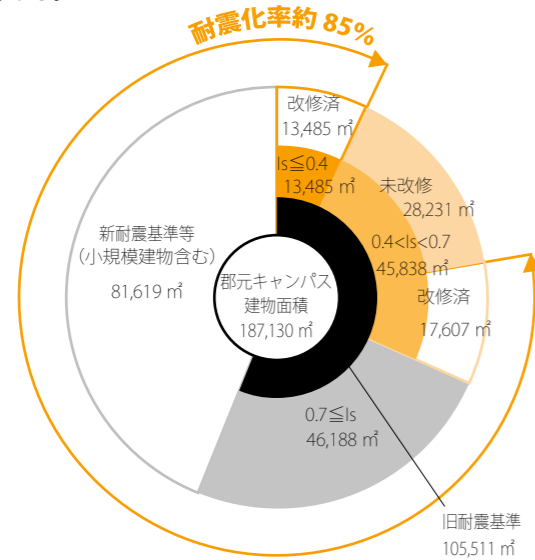
キャンパスの現状

キャンパス計画

施設の現状 THE CURRENT FACILITIES OF KORIMOTO CAMPUS

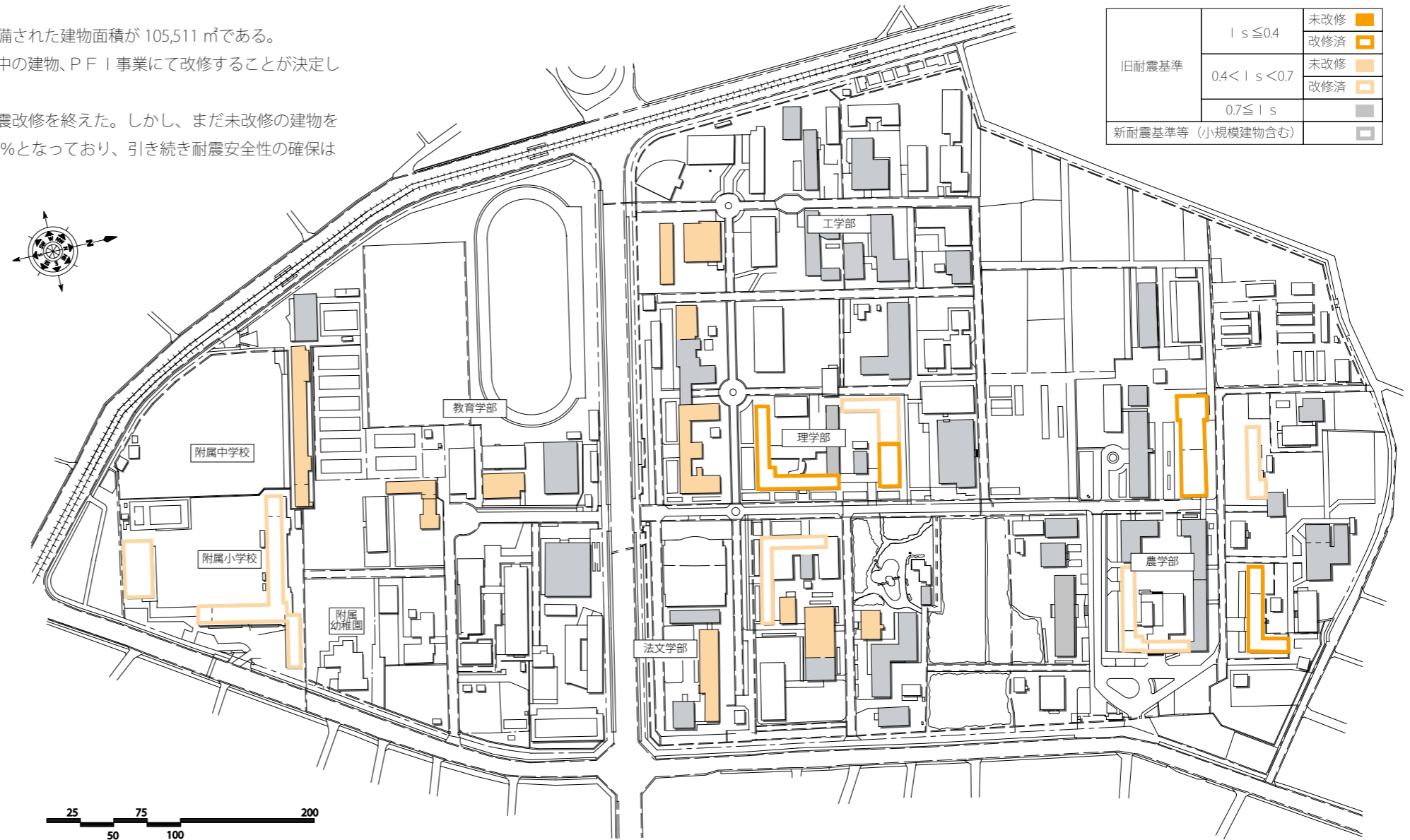
耐震化の現状 -平成20年3月現在-

郡元キャンパスの建物面積は187,130㎡であり、そのうち旧耐震基準で整備された建物面積が105,511㎡である。
 $1 \leq s \leq 0.4$ の建物面積は13,485㎡であったが、全て耐震改修済（現在改修中の建物、PFI事業にて改修することが決定している建物も含む）である。
 $0.4 < 1 \leq s < 0.7$ の建物面積は45,838㎡であったが、17,607㎡について耐震改修を終えた。しかし、まだ未改修の建物を28,231㎡と残しているのが現状である。郡元キャンパスの耐震化率は約85%となっており、引き続き耐震安全性の確保は重要な課題である。



構造耐震指標 (1s値) とは?

建築物の耐震診断で用いられる数値で1981年以前の旧耐震基準の建物の耐震性能を判定するために考案されたもの。
 $1 \leq s \leq 0.3$ 大規模地震で倒壊の危険性が高い
 $0.3 < 1 \leq s < 0.6$ 危険性がある
 $0.6 \leq 1 \leq s$ 危険性が低い
 ※文部科学省は学校建築ではより安全に0.3を0.4、0.6を0.7に置き換えている。



狭隘化の現状 -平成19年5月現在-

郡元キャンパスでは、大学体育施設、大学支援施設については整備率は高いが、大学教育・研究施設、大学図書館、附属学校、大学管理施設は、狭隘状況にある。また、大学教育・研究施設においては各部局等間で整備率に開きがあり、深刻な狭隘状況にある部局も存在するのが現状である。

今後は全学的取組として、必要諸室の見直し、講義室の稼働率の向上、面積の再配分等、スペースマネジメントをより一層促進し、スペースの有効活用を図っていかねばならない。

整備率とは? 保有面積/必要面積で表され、整備率が低いほど狭隘度が高いことになる。

郡元キャンパスの面積区分毎の整備率

面積区分	大学教育・研究施設	大学図書館	大学体育施設	大学支援施設	附属学校	大学管理施設
必要面積 (㎡)	160,512	14,286	4,061	6,170	18,550	8,796
保有面積 (㎡)	133,668	11,883	5,706	8,581	14,935	6,778
整備率 (%)	83.3%	83.2%	140.5%	139.1%	80.5%	77.1%

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

施設の現状 THE CURRENT FACILITIES OF KORIMOTO CAMPUS

整備状況

施設整備の主な手法として、国への概算要求に基づく予算確保による整備（施設整備費補助金、施設費交付事業費等）、学内配分における予算の確保による整備、寄附による整備などがある。

ここでは、第2次科学技術基本計画（緊急整備5か年計画）（平成13年閣議決定）から現在の第3次科学技術基本計画（第2次緊急整備5か年計画）（平成18年閣議決定）までの、近年に整備した主な建物について紹介する。

新営：産学官連携推進機構棟（補助金）



産学官・地域連携や国際学術交流の推進

新営：理工系総合研究棟（補助金）



若手研究者の育成や、独創的・先端的な学術研究を推進

改修：附属小学校（補助金）



高機能再生、老朽・狭隘解消、耐震安全性の確保

改修：理学部1号館（補助金）



高機能再生、老朽・狭隘解消、耐震安全性の確保

改修：農学部研究棟E（補助金（PFI））



高機能再生、老朽・狭隘解消

改修：農学部研究棟D（補助金（PFI））



高機能再生、老朽・狭隘解消、耐震安全性の確保

改修：農学部共通管理棟（補助金（PFI））



高機能再生、老朽・狭隘解消、耐震安全性の確保

新営：インフォメーションセンター（自己財源）

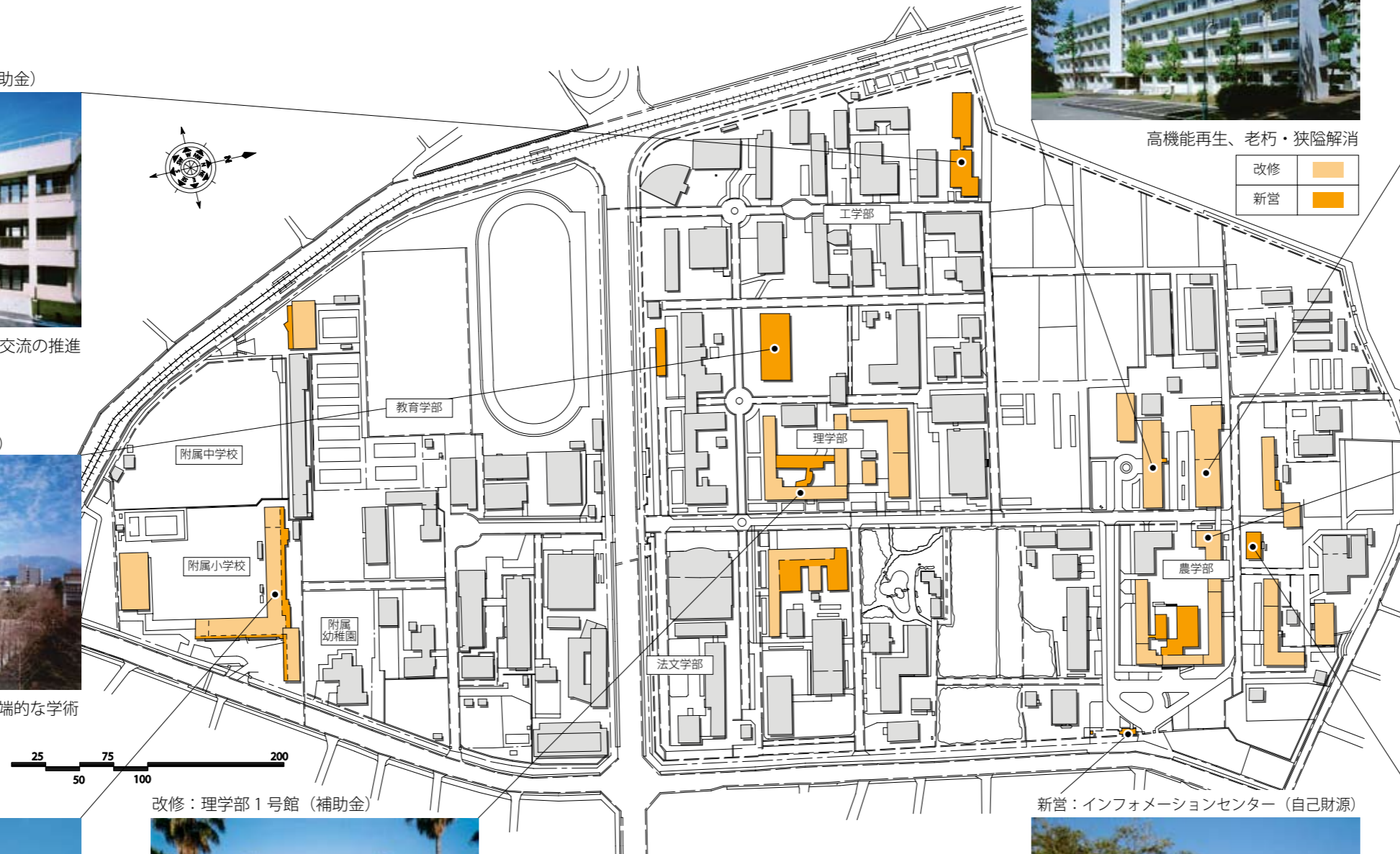


地域との交流拠点、情報の発信

新営：焼酎学講座研究棟（寄附金）



全国唯一の焼酎の学術研究拠点



キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

動線の現状 TRACE OF MOVEMENT

総論

郡元キャンパスの主動線は、キャンパス中央部を南北に貫く基軸を設け、それに直行して東西に支線を配置しているため、歩行者と車両が交錯しており動線の分離が難しい状況である。学生等が最も集まる中央食堂や学生会館及び玉利ヶ池周辺の北辰通りの一部を、わずかに歩行者専用動線として確保している。

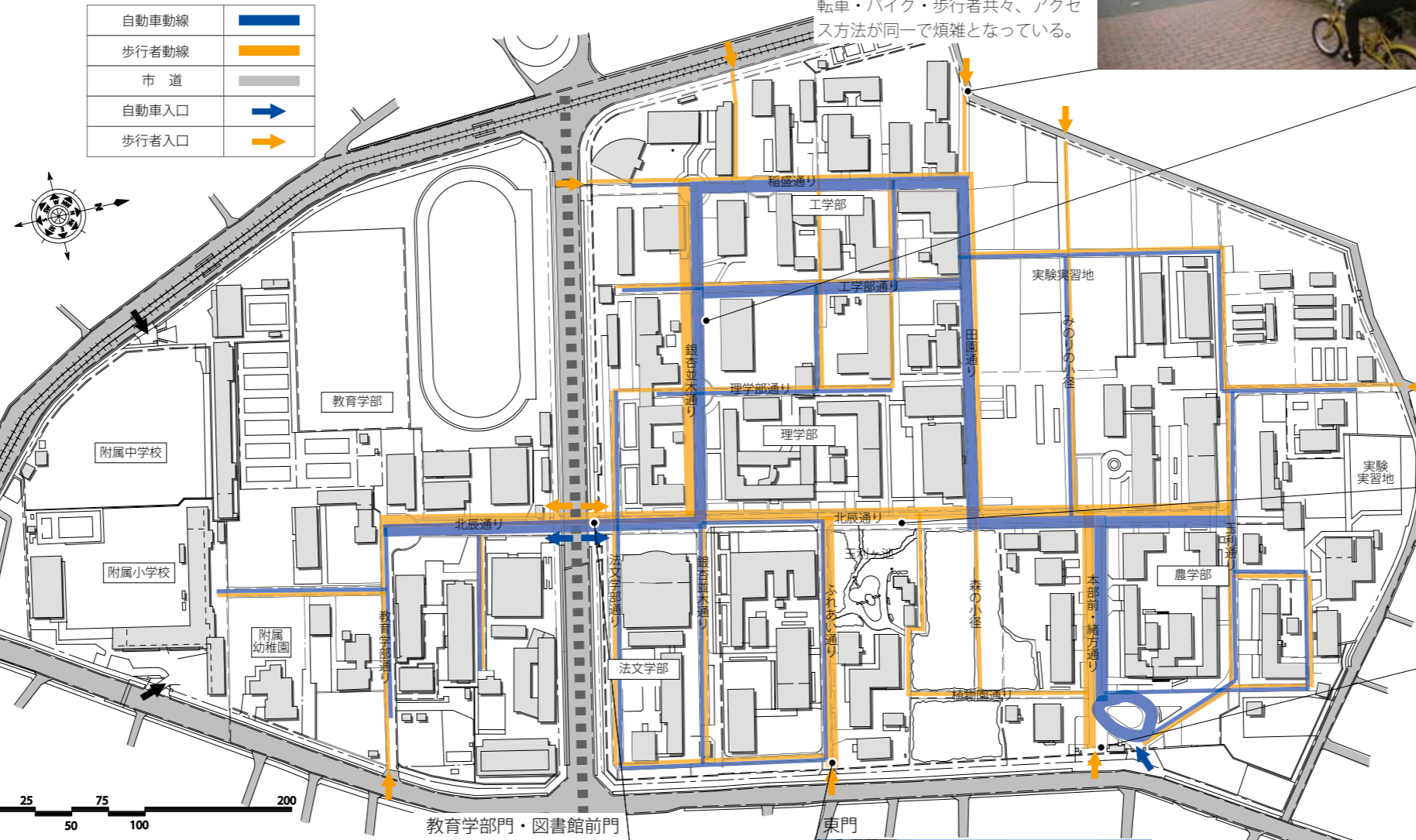
郡元キャンパスは、市道により、南北に分断されており、車両出入口が3ヶ所、歩行者、自転車の出入口が10ヶ所（附属学校を除く）ある。近年、正門は周辺整備とともに開放的な正門に改修したところであるが、他の出入口も、学外者の利用も見据えた大学として相応しい出入口とする必要がある。

自動車動線	
歩行者動線	
市道	
自動車入口	
歩行者入口	

道路のハード面について



主要動線の大部分はインターロッキングで舗装されているが、アスファルトの凹凸がひどい通り、側溝の蓋が無い通り、外灯がない通り等、整備が必要な箇所も多々存在している。また、歩車道のはっきりした区別がない通りもあり、安全・安心で円滑な移動を妨げている。



この2つの門は市道を挟み向かい合い、郡元キャンパスの軸の通りである北辰通りに続く主要な出入口である。歩行者・バイク・自転車・車等の頻繁な往来で非常に混雑している。



通用門



田園通りへと続くこの門は、西側からの主要な出入口で、交通量の多い電車通りと隣接しており、唐湊駅・神田駅から最もアクセスしやすい出入口なのだが、サインもなく学外者にはあまり利用されていない。一方、学内関係者の利用は多く、自転車・バイク・歩行者共々、アクセス方法が同一で煩雑となっている。

銀杏並木通り



銀杏並木通りはその名のとおり、秋には黄金色のトンネル状となりキャンパスに潤いを与えているが、路上駐車や歩車道の区別の曖昧さ等のため、非常に混雑している。

北辰通り



北辰通りの、食堂・玉利ヶ池に挟まれた部分は、歩行者専用となっており、たくさんの人々で賑わう。主要動線で歩行者専用となっているのはこの部分だけである。

正門



近年、大学開放、地域に向けた大学の顔づくりとして、周辺整備も含めインフォメーションセンターが整備された。動線の整理もなされ、また昭和天皇お手植えの銀杏や奄美の高倉等の歴史・情緒のあるものや、手入れのされた緑地帯が一体的に整備され、開放的な空間となっている。

東門は、キャンパスの東側に飲食店、マンション等、学生の生活環境が隣接し、最も多くの学生が利用する出入口である。また、周辺住民の憩いの場にもなっている植物園や玉利ヶ池への入口として正門とともに郡元キャンパスにとって最も重要な出入口である。



駐車場・駐輪場の現状

PARKING LOT & BICYCLE PARKING LOT

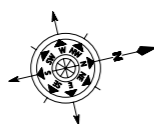
総論

郡元キャンパスの駐車場は、建物の建て詰まりにより、まとまったスペースが少なく、建物周辺に分散しており、計画的な駐車場整備は困難であるのが現状である。

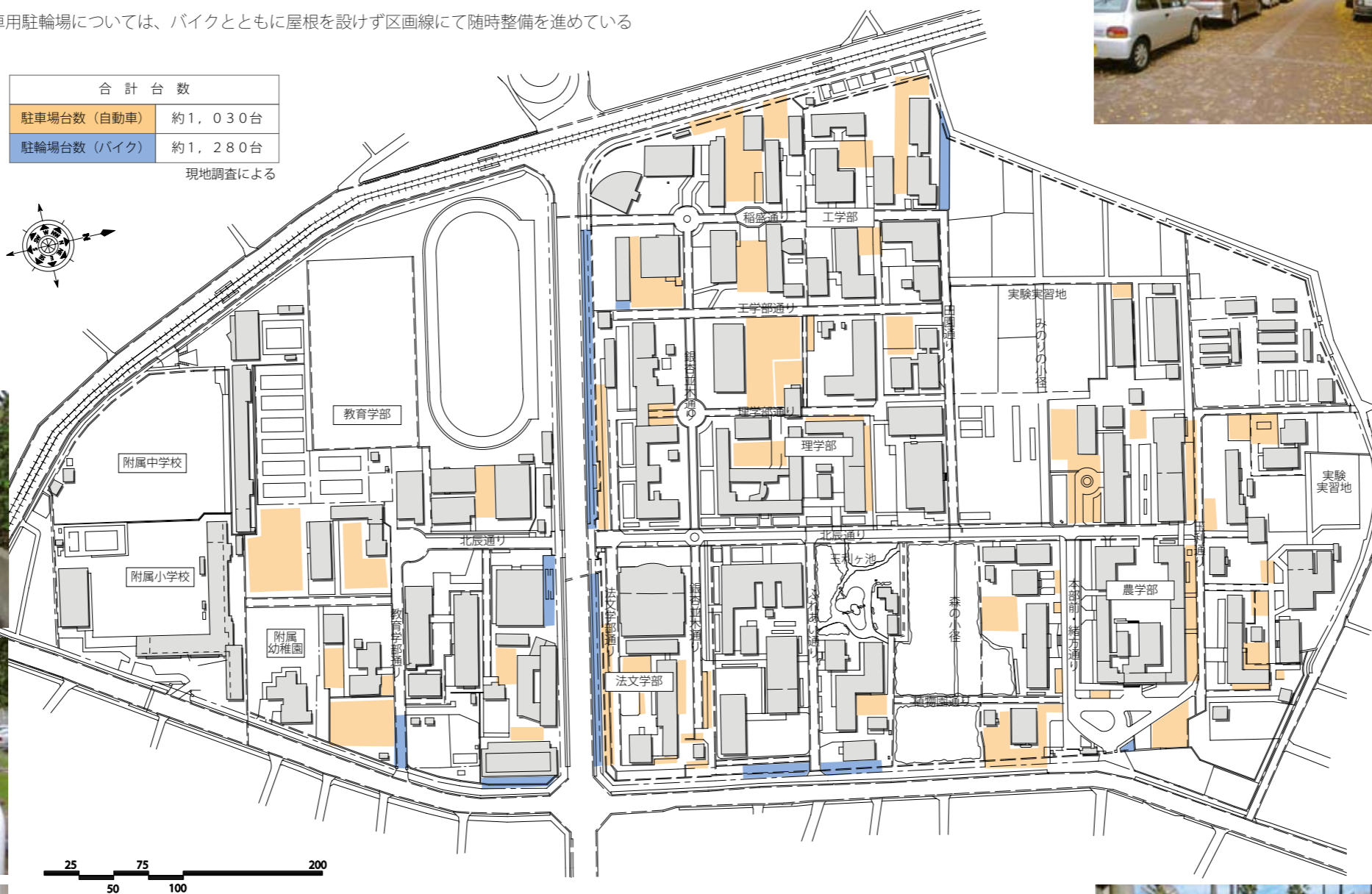
バイク用駐輪場は、昭和61年頃キャンパス周辺に沿って整備され、キャンパス内の進入を禁止しており、キャンパス環境の向上に成功した例の1つである。自転車用駐輪場については、バイクとともに屋根を設けず区画線にて随時整備を進めているが、駐輪場以外の駐輪が目立っている。

合計台数	
駐車場台数(自動車)	約1,030台
駐輪場台数(バイク)	約1,280台

現地調査による



バイク駐輪場



郡元キャンパスはバイクでの入構が禁止されており、キャンパスの外周にバイク駐輪場が配置されている。約1,280台の収容台数があり、比較的うまく整理されているが、教育学部前門周辺など、利用が多く駐輪しきれない場所や、屋内プール西側など、逆に、利用が少なく無駄になってしまっている駐輪場も存在する等、機能的な配置に課題を残している。

郡元キャンパスは自転車の利用が多く、駐輪場以外の駐輪が目立つ。特に北辰通り、ふれあい通り等は慢性的に起きています。経年劣化やアクセスのしづらさ等、需給のバランスだけでなく、配置・形態等も駐輪場以外の駐輪を引き起こす要因の1つとなっている。

駐車場



路上駐車や、緑地やオープンスペースへの駐車等の慢性化により、屋外空間のアメニティの質を下げている。

自転車駐輪場



緑地資源の現状 NATURAL ENVIRONMENT

総論

郡元キャンパスは鹿児島市の中心部にあるにも関わらず、植物園をはじめ、実験実習地等たくさんの緑地資源を有している。緑地資源は、環境教育・自然体験学習としての教育効果や、地球温暖化対策等の環境向上機能・生物の保全機能等の環境保全上の効果、憩い・交流・散策等の屋外アメニティ、地域コミュニティ形成の場としての効果等、大学にとってはもとより、地域にとっても貴重な役割を果たしており、形成・継承していくべき貴重な財産である。

銀杏並木通り



長さ約360mにわたり、イチョウが並ぶ。秋には黄金色のトンネル状となり、キャンパスに潤いを与えている。地域住民の散歩や、写真撮影等で賑わっている。

北辰通り



キャンパスのメインストリートであり、長さ約250mにわたり、ワシントンヤシが並ぶ。通り名は、大正四年第七高等学校第十四回記念祭歌「北辰斜めに」に由来したもので、歴史・情緒・南国鹿児島らしさを演出している。



農学部の前庭、鹿児島高等農林学校初代校長玉利喜造の名に由来する。隣接する植物園と共に貴重な親緑・親水空間であるが、樹木の茂りすぎや水質の汚濁等で、暗い印象の空間となっており利用する人があまり多くない。

約300種の樹木が茂り、東西南北に遊歩道を整備しており、大学関係者はもとより、大学外から散策に訪れる人もおり、近隣地域も含め貴重な親緑空間となっている。しかし、大学外においては、認知度は低い。また、散策はできるが、その場でくつろげる機能は併せ持たず、アクセスが限定的であり、閉鎖的な印象を与えている。



実験実習地



農学部の実験実習地であり、田園風景が広がっている。また鴨や山羊などの動物もおり、中心市街地では他に例を見ない珍しい光景が広がっている。

実験実習地



農学部の実験実習地であり、高木が生い茂っている。通用門の近くにあるが、建物の後方にあり、アクセスが困難で、散策系の緑地としての機能はもちろん鑑賞系の緑地としての機能も乏しい。

正門周辺



近年、大学開放、地域に向けた大学の顔づくりとして、インフォメーションセンターを設置すると共に、正門周辺を整備した。昭和天皇お手植えのイチョウや、奄美の高倉など歴史・情緒のあるものがあり、また歩車分離や樹木の手入れもなされ、見通しの良い空間となっている。

生垣



地域との接点である外周には生垣が植えてあり、整然としている。しかし樹木の生い茂る時期は、閉鎖的なイメージを与え、中に足を踏み入れにくい印象を与えている面もある。

屋外環境の現状 EXTERIOR ENVIRONMENT

総論

郡元キャンパスの隣棟間や中庭等の外部空間は、それら全てが良質なアメニティーを形成しているとは言い難く、また、サイン・ファニチャー・照明設備等も統一性・審美性に乏しく、良好な景観を形成しているとは言い難い状況にある。

それぞれの空間の特性・ニーズ、緑地資源・内部空間との関係性等を踏まえ、学生・教職員・地域住民の憩い・交流の場としての機能を高め、個々の空間を良質な空間にしていくことはもちろん、個々の空間が有機的に連携する魅力的で豊かな屋外環境となるべく、ランドスケープデザインを行っていく必要がある。

「スムーズな外構空間の移動をサポートし、学習意欲の向上と活気を誘発する大学環境の創出」を計画テーマとし、各種のサインアイテムを定め、デザインを統一し、現在年次計画にてサイン整備を進めている。

キャンパスサイン計画（現在進行中）

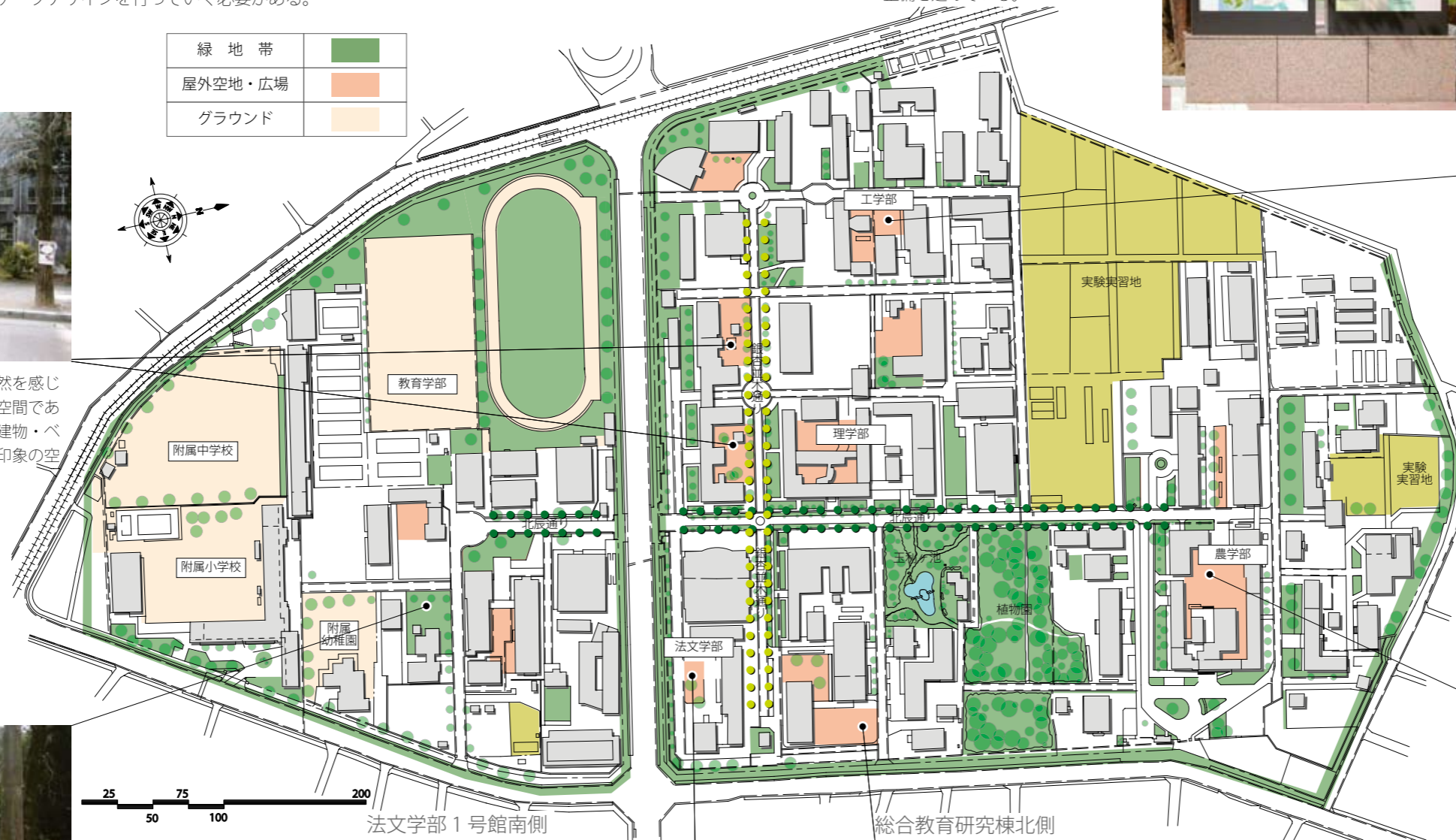


共通教育棟3・4号館北側



銀杏並木通り沿いにあり、四季の自然を感じることのできるポテンシャルの高い空間であるが、周りに存在する劣化の著しい建物・ベンチ・駐輪場等の影響により、暗い印象の空間となってしまう。

緑地帯	
屋外空地・広場	
グラウンド	



建築学科棟2号館南側

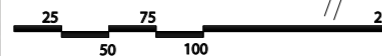


この空間は、木々に囲まれ、芝生が広範囲に広がり、交流・憩いの空間としてポテンシャルの高い空間であるが、ファニチャーもなく、また、外周を生垣に囲まれアクセスが限定的になっており、入りづらく無機質な空間となっている。

音楽美術棟東側



この空間は、トラロープで囲われた緑地の中に美術作品が無造作に置かれているだけで、日当たりが良く芝生が広範囲に広がっているにも関わらず、憩う人の姿が見えず、そのポテンシャルを十分に生かせていない。



法文学部1号館南側



この空間は駐輪場や駐車場、外部からのアクセスが集中する。木々に囲まれるとともに、デザイン性の高いファニチャーが置かれているが、周りを生垣に囲まれ、アクセスが限定的であり、また、あふれた自転車や自動車により煩雑となり、憩う人の姿が見えず、そのポテンシャルを十分に生かせていない。

総合教育研究棟北側



この空間は東門と隣接しており、学外来訪者がアカデミックな空間と出会う空間であり、また食堂や、売店等の福利厚生施設に囲まれ、たくさんの人で賑わう空間である。大階段とそれにつながる総合教育研究棟がランドマークの1つとなっており、ファニチャー、舗装、照明設備等も含め一体的に整備されている。

農学部共通管理棟東側



この空間は、建物内部と連続しているテラス部分は人で賑わっているが、中庭ではそういった姿はあまり見えず、大きな空間である中庭のポテンシャルを十分に生かしているとは言い難い。

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

ゾーニング計画 ZONING PLAN

総論

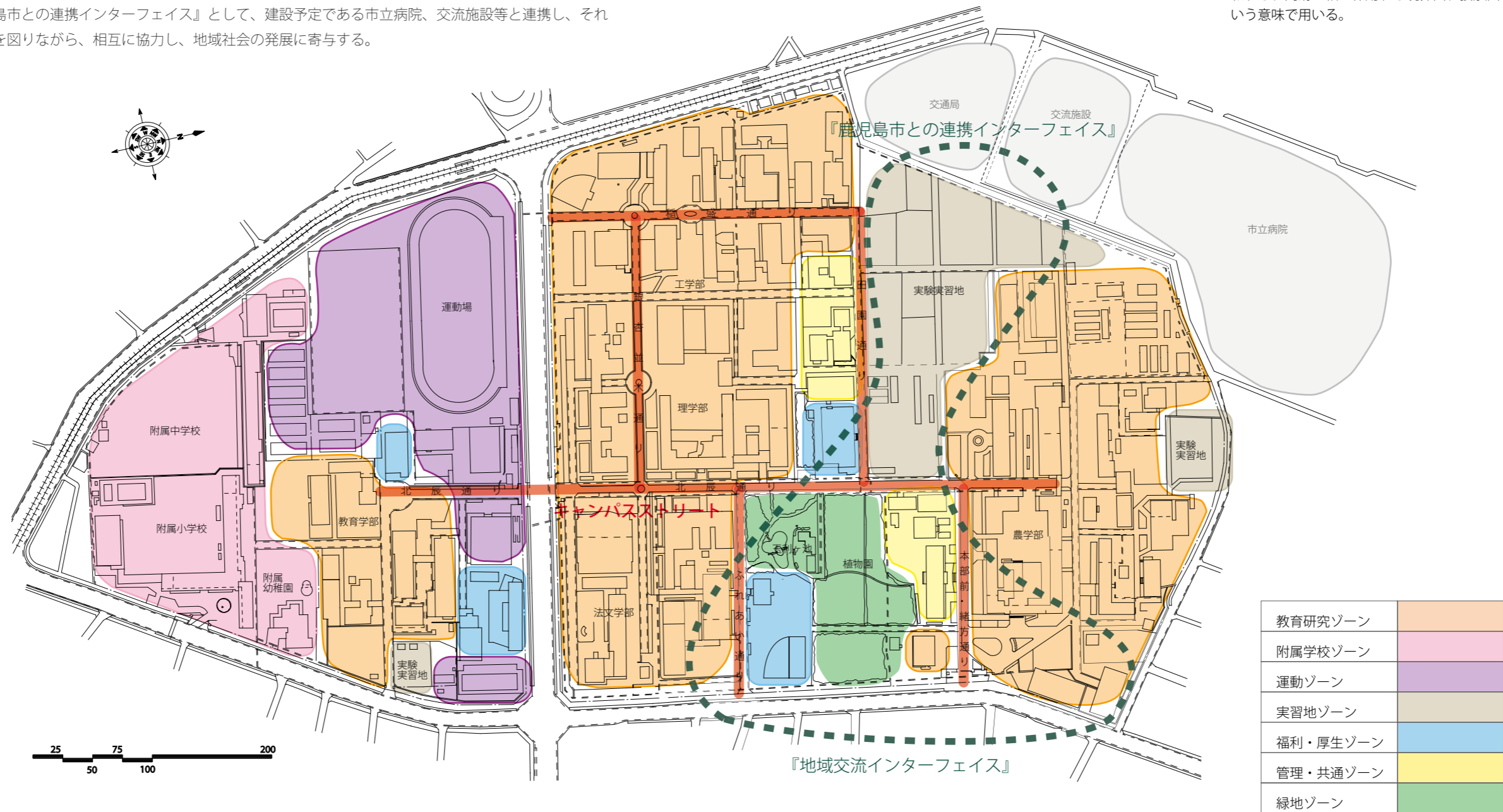
ゾーニングについては、既設の配置を継承しつつ、各ゾーンの現状・発展性・機能性を考慮し、各ゾーンの連携を図る計画とする。北辰通り、稲盛通りを南北方向の、銀杏並木通り、ふれあい通り、本部前・緒方通り、田園通りを東西方向の主軸動線とし、キャンパスストリートと位置付け、これを中心とした整備を行い、各ゾーンの連携を図る。

敷地中央部東側を緑地ゾーン、福利・厚生ゾーンとする。これを囲むように教育研究ゾーンを配置し、敷地南側に附属学校ゾーン、運動ゾーンを集中的に配置する。敷地中央部東側の緑地ゾーン、福利厚生ゾーンを、主要な憩い・交流の場となるように計画する。

地域社会に開かれたキャンパスを具現化するため、敷地中央部東側を『地域交流インターフェイス』と位置付ける。また、敷地北西側を『鹿児島市との連携インターフェイス』として、建設予定である市立病院、交流施設等と連携し、それぞれの資源や機能等の活用を図りながら、相互に協力し、地域社会の発展に寄与する。

※インターフェイスとは…

ここでいうインターフェイスは、結びつく、調和する、円滑に相互作用する境界面、接触面という意味で用いる。



動線計画 TRACE OF MOVEMENT PLAN

総論

動線については、教育研究活動を活発にすべく、安全・安心で円滑な移動を促す計画とする。東西方向、南北方向に基軸となるキャンパスストリートを設定し、キャンパス内を連結する最も重要な動線と位置付ける。歩行者・車両の共用となるため、同じ通りにおいて歩車道の明確化を図ることにより、安全・安心で円滑な動線を確保する。

アプローチについては、外部・内部との関係性等を考慮し、市立病院・交流施設等との連携をはじめ、周辺市街地、公共交通機関等の外部との接続性を高める計画とする。

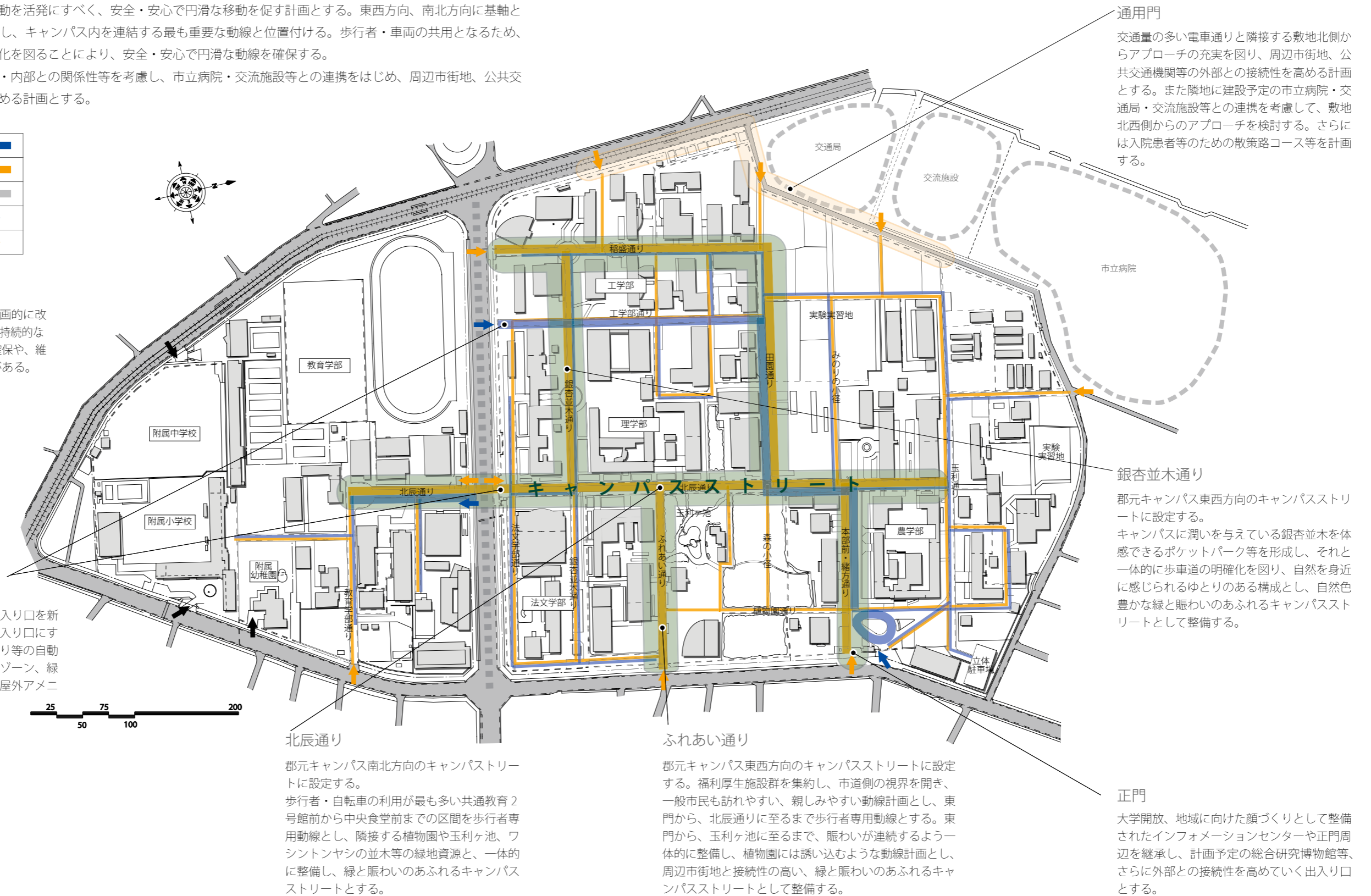
自動車動線	
歩行者動線	
市道	
自動車入口	
歩行者入口	

道路のハード面について

危険箇所・問題点を抽出し、計画的に改善を図っていく。そのためには、持続的な管理・運営を支援するための財源確保や、維持管理運営組織の検討を行う必要がある。

自動車出入口を移設

共通教育棟4号館南側に自動車出入口を新設し、図書館前門を歩行者専用出入口にすることで、銀杏並木通り、北辰通り等の自動車の交通量を減少させ、福利厚生ゾーン、緑地ゾーン等の歩行者中心エリアの屋外アメニティーの充実を図る。



通用門

交通量の多い電車通りと隣接する敷地北側からアプローチの充実を図り、周辺市街地、公共交通機関等の外部との接続性を高める計画とする。また隣地に建設予定の市立病院・交通局・交流施設等との連携を考慮して、敷地北西側からのアプローチを検討する。さらには入院患者等のための散策路コース等を計画する。

銀杏並木通り

郡元キャンパス東西方向のキャンパスストリートに設定する。キャンパスに潤いを与えている銀杏並木を体感できるポケットパーク等を形成し、それと一体的に歩車道の明確化を図り、自然を身近に感じられるゆとりのある構成とし、自然豊かな緑と賑わいのあるキャンパスストリートとして整備する。

正門

大学開放、地域に向けた顔づくりとして整備されたインフォメーションセンターや正門周辺を継承し、計画予定の総合研究博物館等、さらに外部との接続性を高めていく出入口とする。

北辰通り

郡元キャンパス南北方向のキャンパスストリートに設定する。歩行者・自転車の利用が最も多い共通教育2号館前から中央食堂前までの区間を歩行者専用動線とし、隣接する植物園や玉利ヶ池、ワシントンヤシの並木等の緑地資源と、一体的に整備し、緑と賑わいのあるキャンパスストリートとする。

ふれあい通り

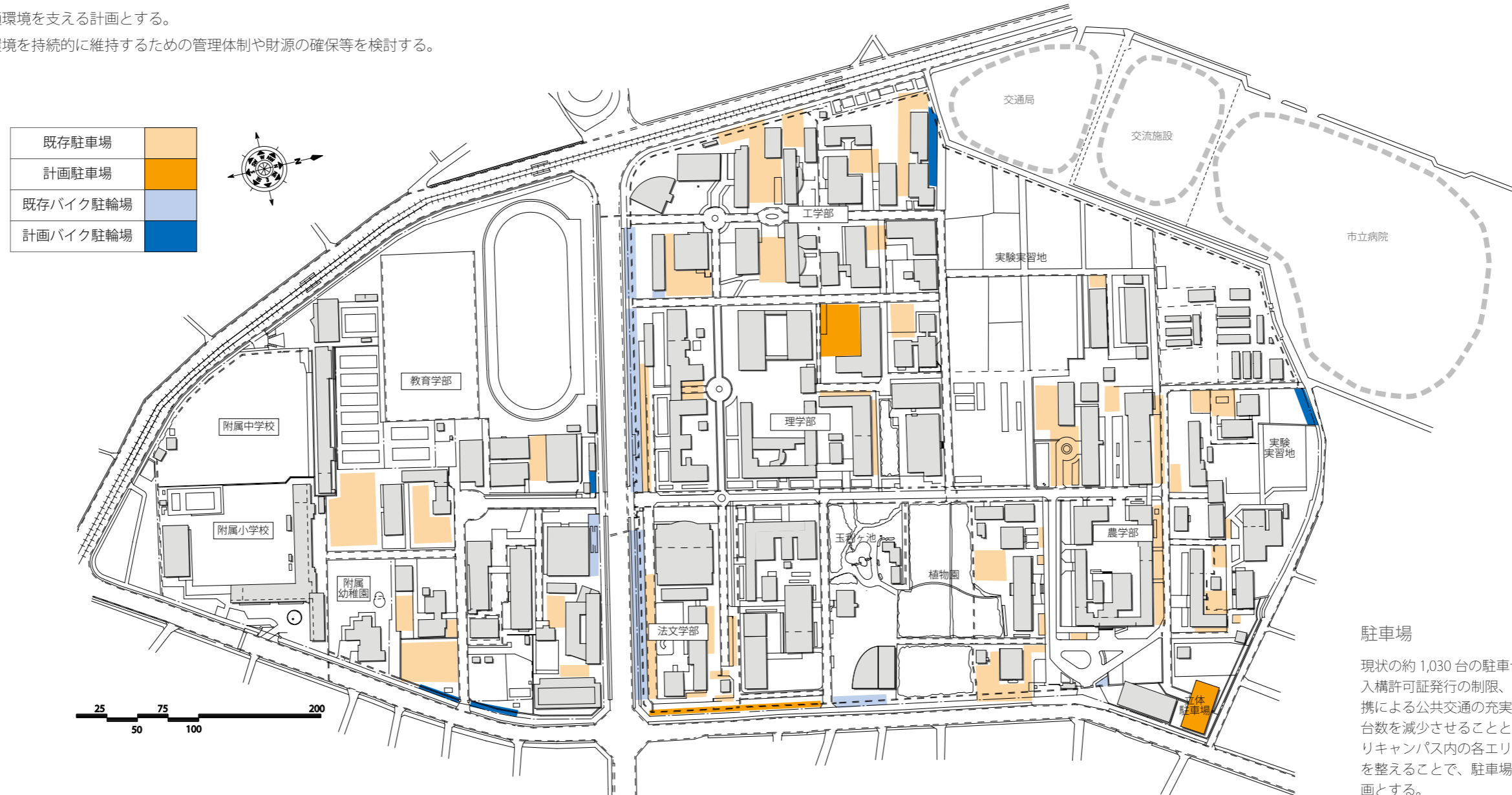
郡元キャンパス東西方向のキャンパスストリートに設定する。福利厚生施設群を集約し、市道側の視界を開き、一般市民も訪れやすい、親しみやすい動線計画とし、東門から、北辰通りに至るまで歩行者専用動線とする。東門から、玉利ヶ池に至るまで、賑わいが連続するよう一体的に整備し、植物園には誘い込むような動線計画とし、周辺市街地と接続性の高い、緑と賑わいのあるキャンパスストリートとして整備する。

駐車場・駐輪場計画 PARKING LOT & BICYCLE PARKING LOT PLAN

総論

環境保全への認識のもと、基本的には公共交通機関の利用を促す計画とする。地域交流・教育研究の進展、キャンパス再整備の各種計画の進展、周辺交通事情（バス・市電）の変化に対応し、さらには屋外環境・緑地資源等との調和を図り、安全・安心で快適な交通環境を支える計画とする。

また、良好な交通環境を持続的に維持するための管理体制や財源の確保等を検討する。



駐車場

現状の約 1,030 台の駐車台数を維持しながら、入構許可証発行の制限、公共交通機関との連携による公共交通の充実等により、乗り入れ台数を減少させることと、機能的な配置によりキャンパス内の各エリアの需給のバランスを整えることで、駐車場不足の解消を図る計画とする。

屋外環境のアメニティーの質を下げている、路上駐車や緑地・屋外広場への駐車対策として、緑地・屋外広場と駐車場の明確な差別化、駐車場までのスムーズな誘導を促すサイン等の整備を図る。また、全学的なルールの制定等、一定の規制も必要である。

これらの計画を実現し、良好な交通環境を持続的に維持するための財源確保として、受益者負担等が考えられる。

自転車駐輪場

屋外環境のアメニティーの質を下げている、路上駐輪や緑地・屋外広場への駐輪対策として、キャンパス全体における駐輪場の機能的な配置、歩行者アプローチに隣接した駐輪場の配置、緑地・屋外広場と駐輪場の明確な差別化、駐輪場までのスムーズな誘導を促すサイン等の整備を図る。また、全学的なルールの制定等、一定の規制も必要である。

バイク駐輪場

現状では、キャンパス外周に駐輪場を配置し、構内へのバイクの入構を禁止している。現状の約 1,280 台の駐車台数を維持しながら、そのシステムを継承し、発展させる計画とする。利用量が多く、対応しきれていない駐輪場については、これまでと同様に外周に増設し、利用量が少なく無駄になっている駐輪場については、他への用途転換を図る計画とする。また歩行者動線と重なっている部分については、動線の分離を図り、安全・安心で快適な歩行者動線を確保する。

合計台数	現状	計画
駐車場台数 (自動車)	約 1,030 台	約 1,120 台
駐輪場台数 (バイク)	約 1,280 台	約 1,240 台

緑地資源計画 THE NATURAL ENVIRONMENT PLAN

総論

現状の豊かな緑地を、大学はもとより、地域に対しても貴重な財産と捉え、継承・形成を図る。また、環境教育・自然体験学習等の教育の促進、憩い・交流・散策等の屋外アメニティの向上等を積極的に図るとともに、地球温暖化対策等の環境保全機能・生物の保全機能等の環境保全上の効果も十分考慮した計画とする。

銀杏並木通り

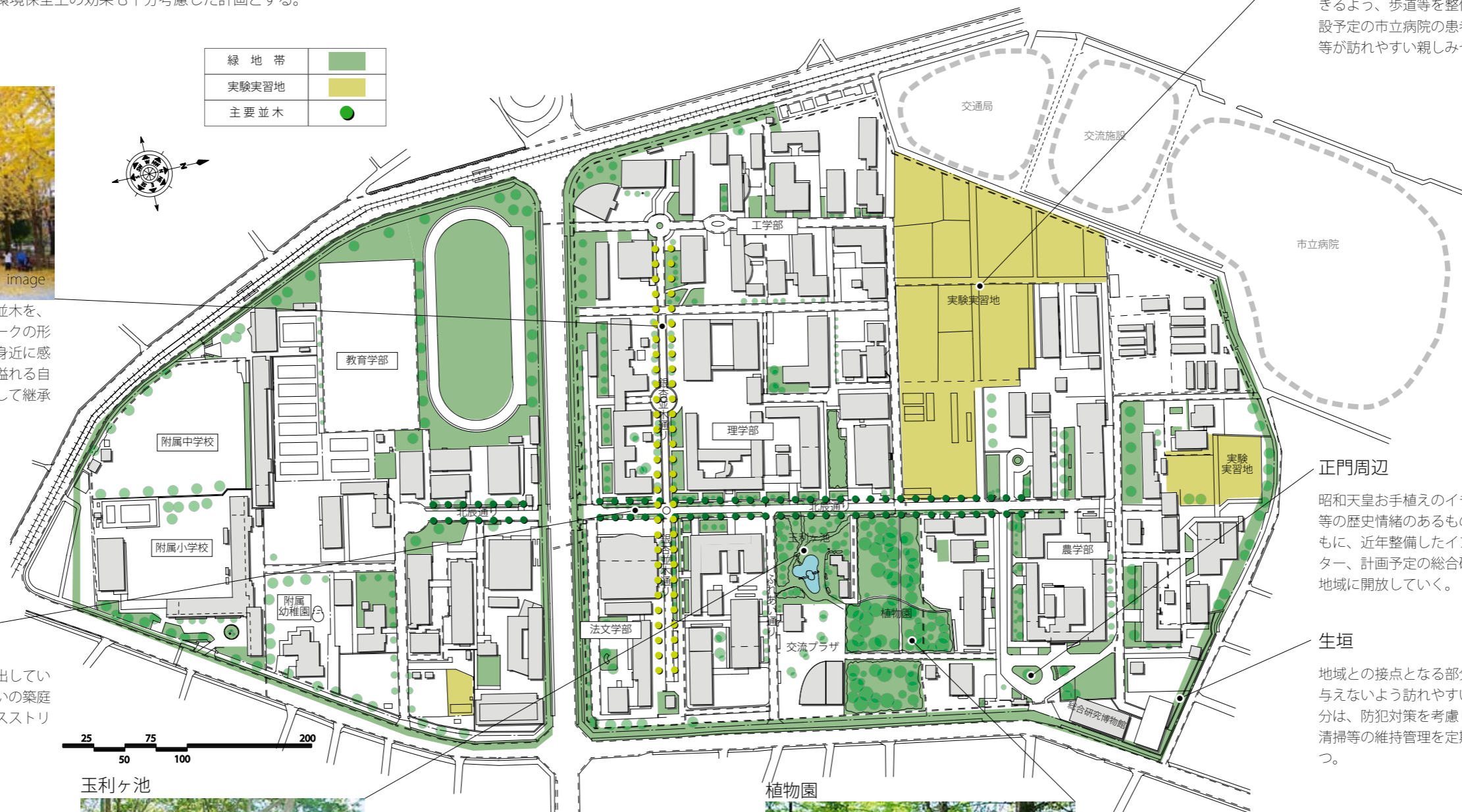


キャンパスに潤いを与えている銀杏並木を、歩車道の明確な分離や、ポケットパークの形成、ファニチャーの配置等により、身近に感じられるよう整備し、緑と賑わいの溢れる自然色豊かなキャンパスストリートとして継承する。

北辰通り

歴史・情緒・南国鹿児島らしさを演出しているワシントンヤシの並木を、通り沿いの築庭等と共に、シンボリックなキャンパスストリートとして継承する。

緑地帯	
実験実習地	
主要並木	



実験実習地

実験実習地としての機能だけでなく、都市部では珍しい農地が広がる牧歌的風景を觀賞できるように、歩道等を整備する。また隣地に建設予定の市立病院の患者、交流施設の利用者等が訪れやすい親しみやすい動線計画とする。

正門周辺

昭和天皇お手植えのイチヨウや、奄美の高倉等の歴史情緒のあるものを継承していくとともに、近年整備したインフォメーションセンター、計画予定の総合研究博物館と一体的に地域に開放していく。

生垣

地域との接点となる部分は、閉鎖的な印象を与えないよう訪れやすい形態とする。他の部分は、防犯対策を考慮し継承するが、剪定や清掃等の維持管理を定期的に行い、美観を保つ。

玉利ヶ池



隣接する交流プラザ、キャンパスストリートと、賑わいが連続するよう一体的に整備し、憩い・交流系の緑地として整備する。また隣接する植物園には誘い込むような動線計画とする。樹木の茂りすぎや、水質の汚濁等により、暗い印象の空間とならないよう、樹木の剪定や、池の清掃等を定期的に行い、清潔な状態を保つ。

植物園



環境教育・自然体験学習等を行うため、あまり人の手は入れず、利用する人々の心を癒す散策系の緑地として整備する。既存の遊歩道に、最小限のファニチャーを配置し、鳥のさえずり、木々の匂い等、純粋な自然を体感できる空間とする。また、中に誘い込むような動線計画とし、利用を促進する。

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

屋外環境計画 EXTERIOR ENVIRONMENT PLAN

総論

それぞれの外部空間の特性・ニーズ、緑地資源・内部空間との関係性等を踏まえ、特色ある整備をし、それらを各エリアの憩い・交流の拠点となるべく、バランスよく配置し、それらの有機的連携強化を図ることで、キャンパス全体の屋外環境のアメニティの質を向上させる。また、サイン整備は現在進行中であるが、サイン、外灯、ベンチ、ゴミ箱等のデザインの方向性を確立し、統一を図り、調和のとれたキャンパスを演出する。胸像・慰霊碑・記念樹等の歴史的資源も考慮し、一体的に整備する。

ポケットパーク



建物の形状の凸凹により生じたこの空間を、銀杏並木の自然の潤いを感じることのできるポケットパークとして整備する。ファニチャーを機能的に配置し、隣接するキャンパスストリートと一体的に整備し、緑と賑わいのあふれる憩い・交流の空間として整備する。

アートプラザ



教育学部美術科の美術作品等を展示し、学生の創作意欲を向上させるとともに、学生・教職員・地域住民が芸術に親しみながら憩い・交流のできるアートプラザとして整備する。見せ方を工夫する、人を誘い込むような仕掛け等を考慮する。

緑地帯	
実験実習地	
屋外空地・広場	
グラウンド	



法文学部 1号館南側

煩雑な動線の整理、限定的なアクセスの解除等、足を踏み入れやすい、親しみやすい仕掛けを施し、既存のファニチャーを生かした憩い・交流の空間としての充実を図る。

建築学科棟 2号館南側

外周を取り囲む生垣の排除、ファニチャー等の配置等、親しみやすい仕掛けを施し、憩い・交流の空間としての充実を図る。

農学部共通管理棟東側

建物内部と連続しているテラス部分だけでなく、大空間である中庭部分でも賑わいが連続するように仕掛けを施し、憩い・交流の空間としての充実を図る。

交流プラザ



学生・教職員、一般市民の交流の場として整備する。福利厚生施設群を集約し、市道側の視界を開き、一般市民も訪れやすい、親しみやすい空間を演出する。また、隣接する玉利ヶ池とは、賑わいが連続するよう一体的に整備し、植物園には誘い込むように整備する。

地域社会に開かれたキャンパス計画 CAMPUS PLAN HELD TO LOCAL SOCIETY

総論

地域社会に開かれたキャンパスを具現化するため、敷地中央部東側を中心に、『地域交流インターフェイス』としてキャンパスを地域に開放する。

また、敷地北西側を『鹿児島市との連携インターフェイス』として、建設予定である市立病院、交流施設、交通局等と連携し、それぞれの資源や機能等の活用を図りながら、相互に協力し、地域社会の発展に寄与する。

※インターフェイスとは…

ここでいうインターフェイスは、結びつく、調和する、円滑に相互作用する境界面、接触面という意味で用いる。

ポケットパーク

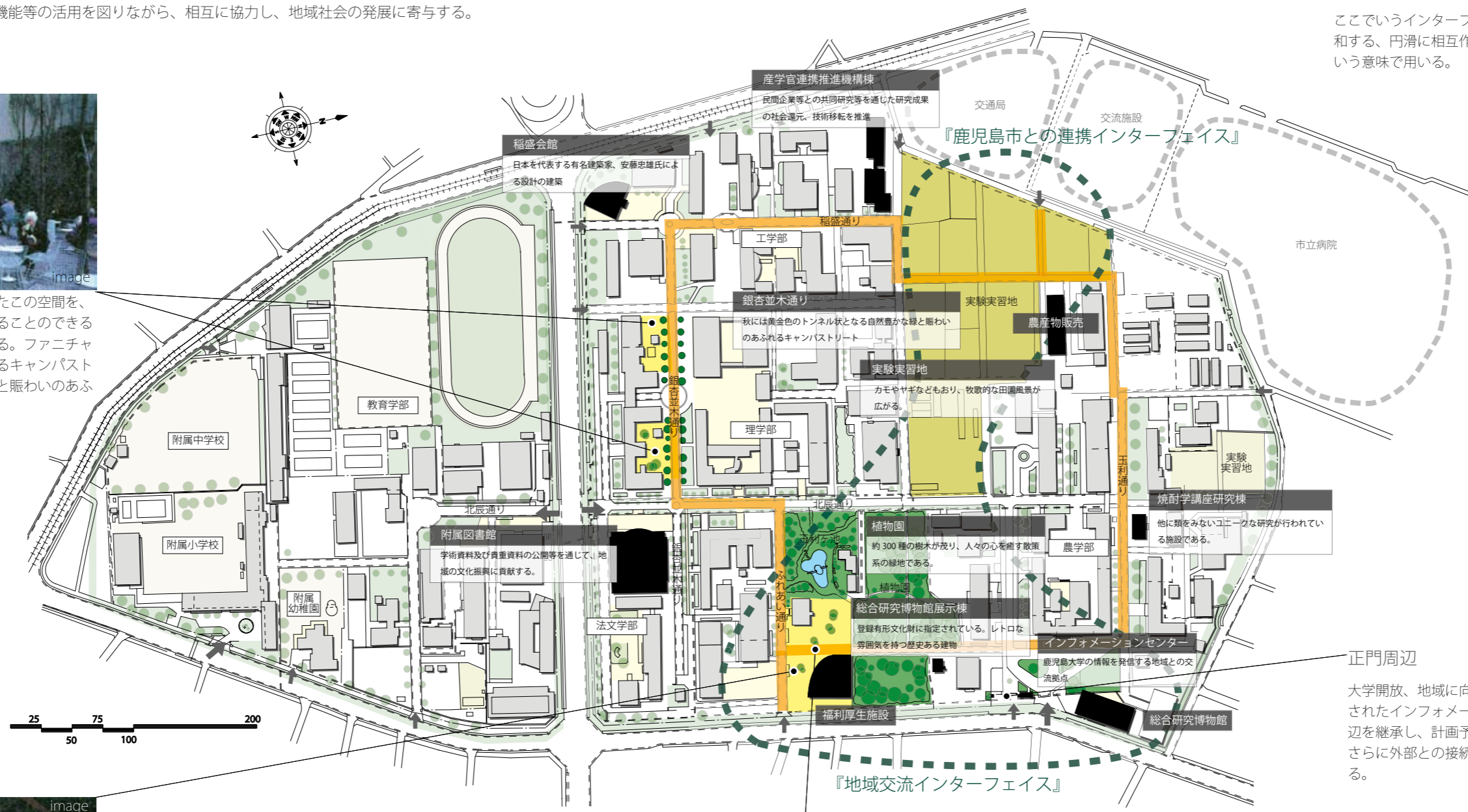


建物の形状の凸凹により生じたこの空間を、銀杏並木の自然の潤いを感じることのできるポケットパークとして整備する。ファニチャーを機能的に配置し、隣接するキャンパスストリートと一体的に整備し、緑と賑わいのあふれる空間として整備する。

交流プラザ



学生・教職員、一般市民の交流の場として整備する。福利厚生施設群を集約し、市道側の視界を開き、一般市民も訪れやすい、親しみやすい空間を演出する。
また、隣接する玉利ヶ池とは、賑わいが連続するよう一体的に整備し、植物園には誘い込むように整備する。



散策路

実験実習地→稲盛通り→銀杏並木通り→北辰通り→ふれあい通り→植物園通り→玉利通りという流れの散策路を設定し、市立病院患者、一般市民等に開放し、大学構内の様々な資源を体感してもらう計画とする。
代表的な資源として、大学の知はもちろん、実験実習地・銀杏並木・玉利ヶ池・植物園等の自然、焼酎蔵をイメージした焼酎学講座研究棟・日本を代表する建築家安藤忠雄氏による設計の稲盛会館・登録有形文化財の総合研究博物館展示棟などの特色ある建築物等が挙げられる。また、特に市立病院の患者に対しては、実験実習地の資源により、医療法の1つとして注目されている、動物によるアニマルセラピー、園芸を体験することによる園芸セラピー等の、医療面での貢献が期待できる。

正門周辺

大学開放、地域に向けた顔づくりとして整備されたインフォメーションセンターや正門周辺を継承し、計画予定の総合研究博物館等、さらに外部との接続性を高めていく計画とする。

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

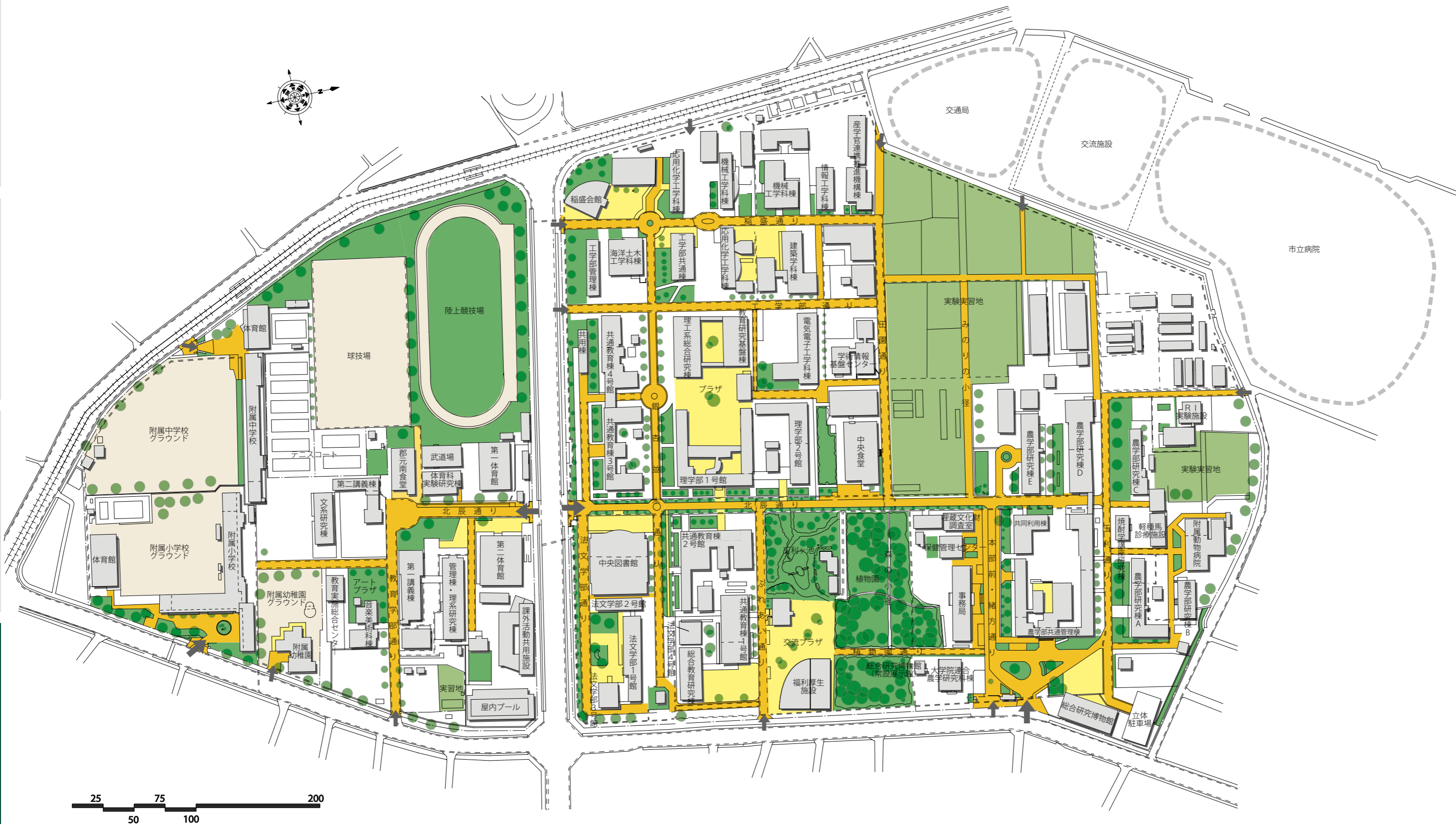
キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

将来構想配置図

PLAN ARRANGEMENT CHART IN THE FUTURE



キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

将来構想イメージ図 PLAN IMAGE IN THE FUTURE



キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

桜ヶ丘キャンパス

OUTLINE OF SAKURAGAOKA CAMPUS

桜ヶ丘キャンパス概要

－平成 19 年 5 月現在－

- 設置年度：昭和 47 年
- 敷地面積：223,157 m²
- 建築面積：32,648 m²
- 延面積：128,246 m²
- 都市計画区域：都市計画区域内 市街化区域
- 防火地域：－
- 用途地域：第 1 種中高層住居専用地域
- 日影規制：4－2. 5 時間
- 都市計画施設：水道、下水道等供給施設又は処理施設
- その他の地域：宅地造成工事規制区域
公害防止地域
(大気汚染、騒音、水質汚濁)
- 地震地域係数：3 種
- 地盤種別：2 種
- 積雪寒冷地域：その他

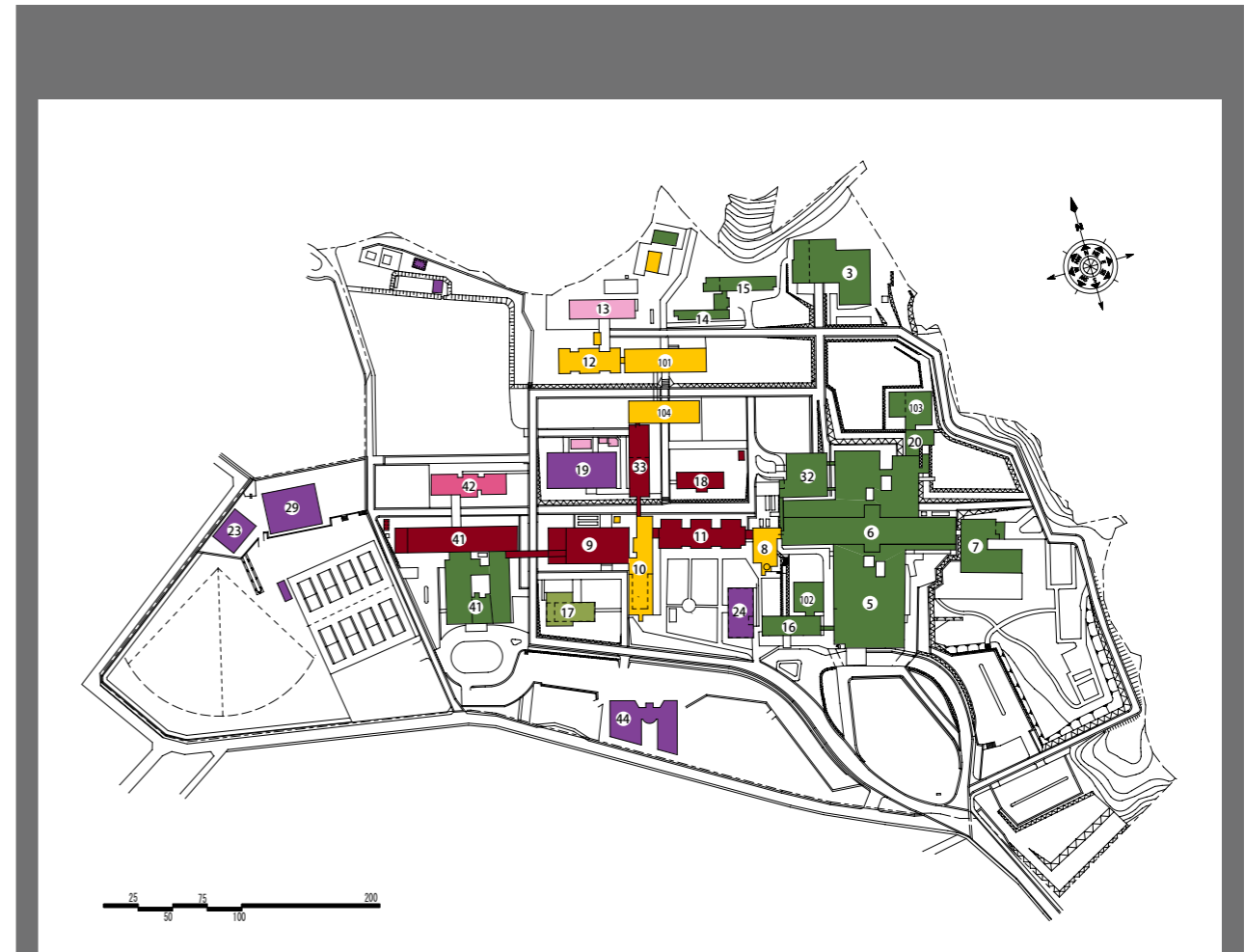
桜ヶ丘キャンパスの位置付け

桜ヶ丘キャンパスは、医学、歯学を軸とする医学・医療関連分野における医学教育研究及び医療実践の拠点であることはもちろん、都心部に近い至便性を活かした総合医療の医療機関及び特定機能病院として、高度先進医療・研究開発・離島を含む地域医療・救命救急等、南九州における中核的役割を担う。また、本学附属病院は新構想病院(医・歯学部附属病院の統合、診療センター化)となり、「21 世紀に輝くヒューマントータルケア病院」として機能強化を図り、南九州における中核的医療機関として、さらなる発展を目指す。

平成 20 年 2 月撮影



桜ヶ丘キャンパス配置図



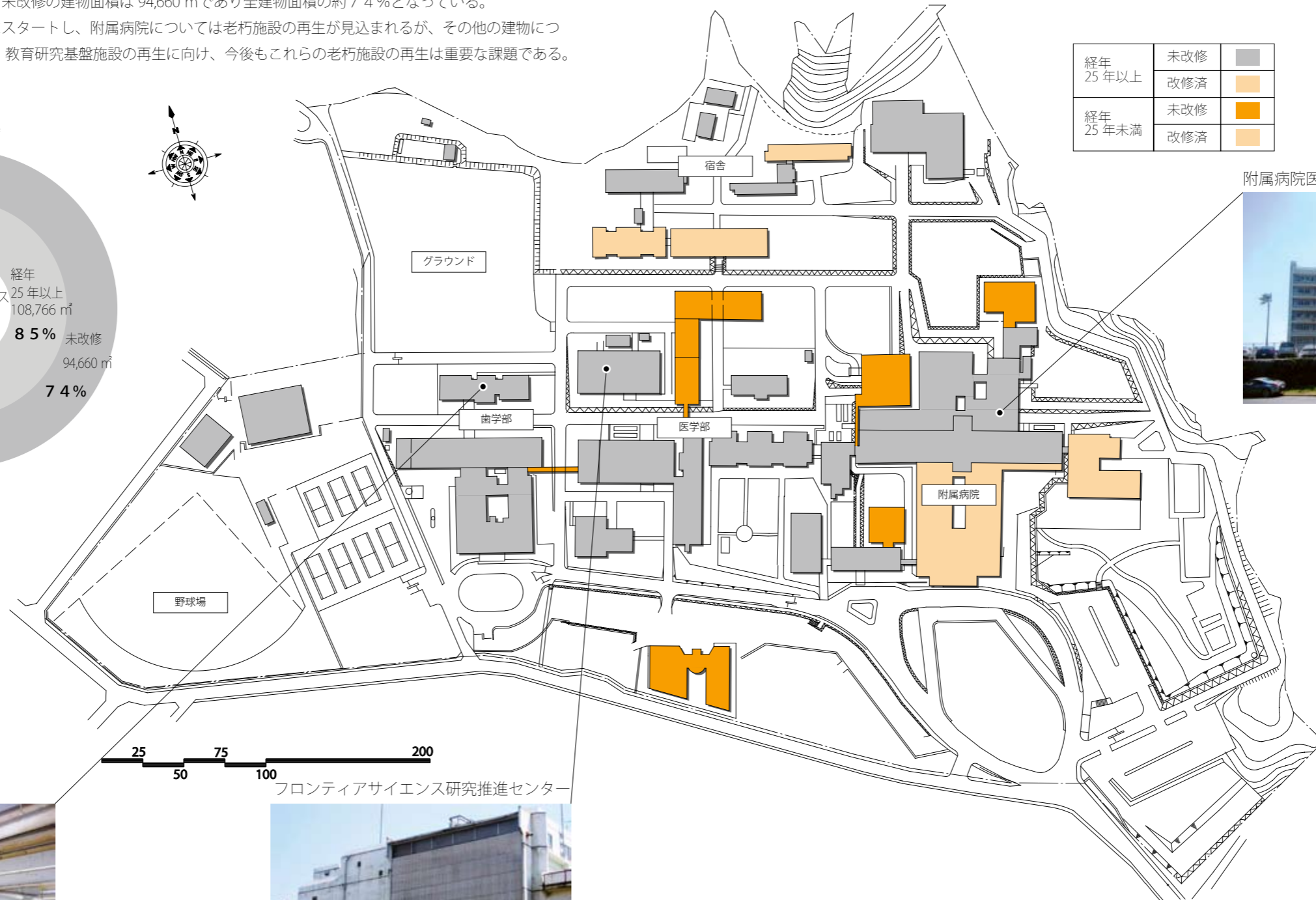
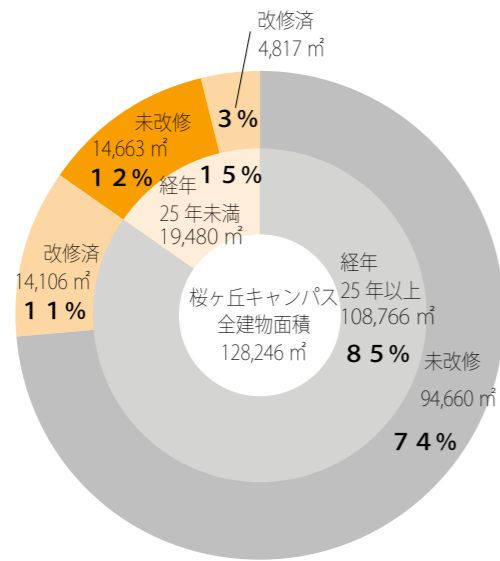
医学部	医歯学総合研究科	附属病院	学内共同利用施設等
8 医学部臨床講義棟	9 医歯学総合研究科 2	3 中央機械棟	23 武道場
10 医学部基礎講義実習棟	11 医歯学総合研究科 3	5 附属病院医科診療棟	24 図書館桜ヶ丘分館
12 保健学科西研究棟	18 RI 実験施設	6 附属病院医科病棟	29 体育館
101 保健学科東研究棟	33 医歯学総合研究科 4	7 結核感染病棟	44 鶴陵会館
104 共通教育棟	41 医歯学総合研究科 1	14 看護師宿舎	19 フォティサイエンス研究推進センター
		15 看護師宿舎	福利厚生施設等
		16 附属病院管理棟	17 福利厚生施設
歯学部		20 ライナック	
42 歯学部講義実習棟		32 救急集中治療棟	事務局等
		41 医歯学総合研究科 1	13 学生宿舎
		102 医療情報施設	
		103 MRI-CT 装置棟	

施設の現状 THE CURRENT FACILITIES OF SAKURAGAOKA CAMPUS

老朽化の現状 -平成19年5月現在-

桜ヶ丘キャンパスの全建物面積 128,246 m²のうち、経年25年以上の建物面積が 108,766 m²であり、約85%を占めている。これらの経年25年以上の建物のうち、未改修の建物面積は 94,660 m²であり全建物面積の約74%となっている。

附属病院再開発事業が平成19年度にスタートし、附属病院については老朽施設の再生が見込まれるが、その他の建物についてはまだまだ老朽施設は残っており、教育研究基盤施設の再生に向け、今後もこれらの老朽施設の再生は重要な課題である。



キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

施設の現状 THE CURRENT FACILITIES OF SAKURAGAOKA CAMPUS

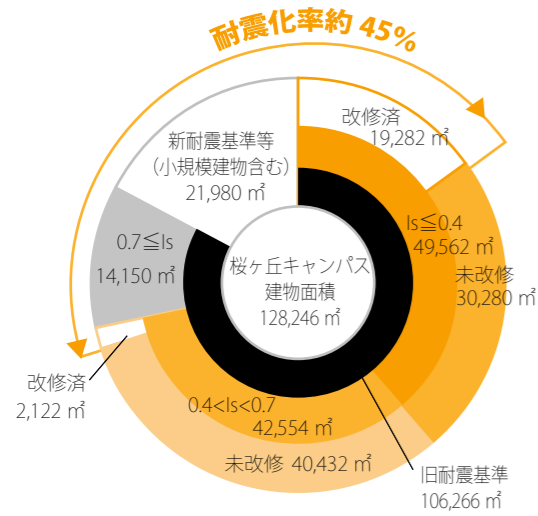
耐震化の現状 -平成20年3月現在-

桜ヶ丘キャンパスの建物面積は128,246㎡であり、そのうち旧耐震基準で整備された建物面積が106,266㎡であり、桜ヶ丘キャンパス全体の約83%を占めている。

1s ≤ 0.4の建物面積は49,562㎡であったが、そのうち19,282㎡については耐震改修済みであり、また、未改修の30,280㎡についても附属病院再開発事業にて改修することになっている。

0.4 < 1s < 0.7の建物面積は42,554㎡であったが、未だ2,122㎡の改修にとどまっている。附属病院再開発事業で改修する建物を除いても、未改修の建物をまだまだ多く残しているのが現状である。

桜ヶ丘キャンパスの耐震化率は約45%と低く、耐震安全性の確保は緊急な課題である。



構造耐震指標（1s値）とは？

建築物の耐震診断で用いられる数値で1981年以前の旧耐震基準の建物の耐震性能を判定するために考案されたもの。

- 1s ≤ 0.3・・・大規模地震で倒壊の危険性が高い
- 0.3 < 1s < 0.6・・・危険性がある
- 0.6 ≤ 1s・・・危険性が低い

※文部科学省は学校建築ではより安全に0.3を0.4、0.6を0.7に置き換えている。

狭隘化の現状 -平成19年5月現在-

桜ヶ丘キャンパスでは、大学教育・研究施設、大学図書館、大学体育施設、大学支援施設、附属病院において狭隘状況にある。大学図書館、大学支援施設の整備率については、それぞれ54.0%、56.5%と極端に低く、深刻な狭隘状況にある。

附属病院については、再開発事業により狭隘解消が見込めるが、それ以外の面積区分については、全学的取組として、必要諸室の見直し、講義室の稼働率の向上、面積の再配分等、スペースマネジメントをより一層促進し、スペースの有効活用を図っていかねばならない。

整備率とは？・・・保有面積/必要面積で表され、整備率が低いほど狭隘度が高いことになる。

桜ヶ丘キャンパスの面積区分毎の整備率

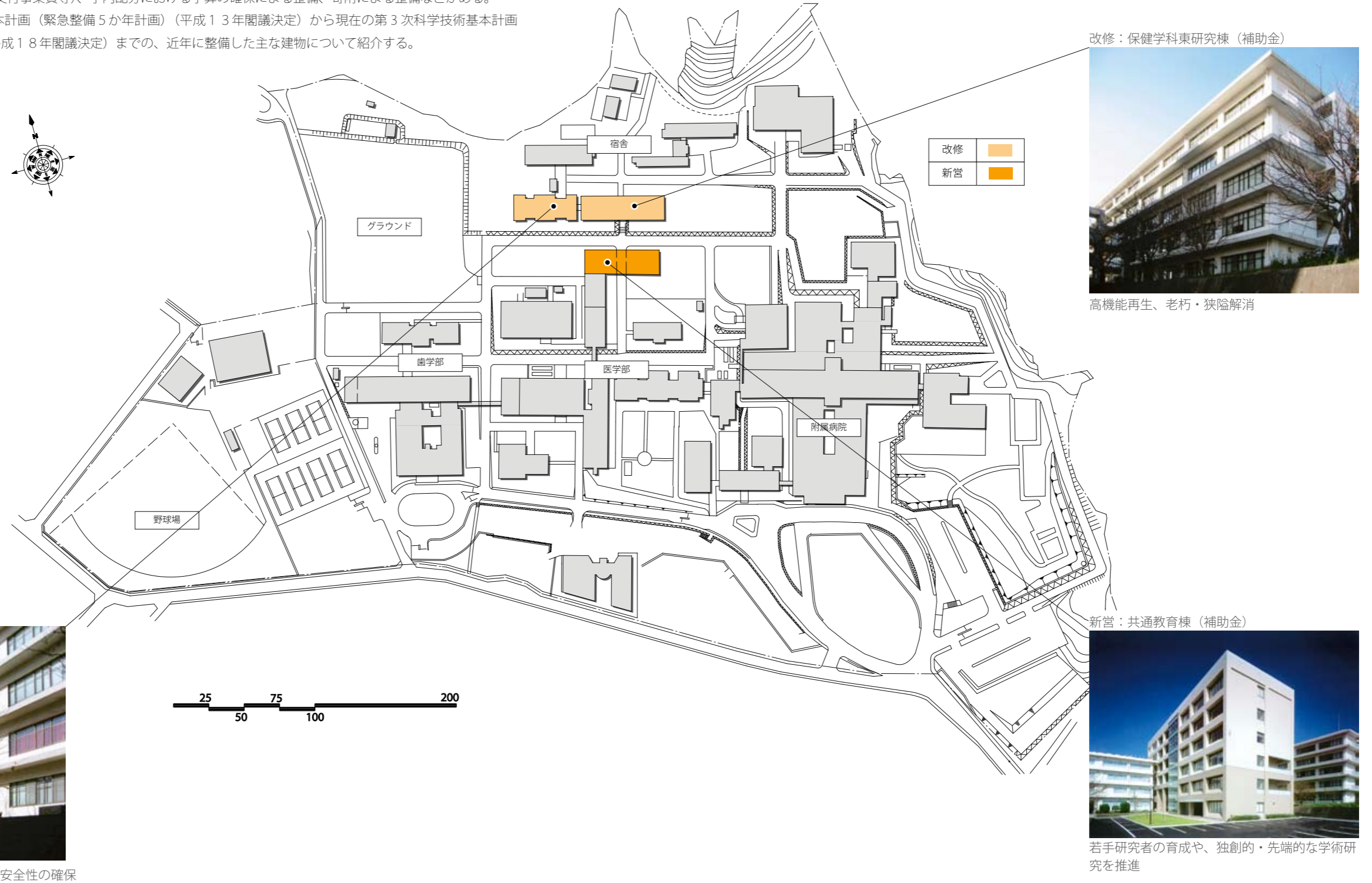
面積区分	大学教育・研究施設	大学図書館	大学体育施設	大学支援施設	附属病院	大学管理施設
必要面積 (㎡)	69,022	3,591	1,932	2,480	67,563	1,060
保有面積 (㎡)	52,697	1,940	1,607	1,402	55,822	1,568
整備率 (%)	76.3%	54.0%	83.2%	56.5%	82.6%	147.9%

施設の現状 THE CURRENT FACILITIES OF SAKURAGAOKA CAMPUS

整備状況

施設整備の主な手法として、国への概算要求に基づく予算確保による整備（施設整備費補助金、施設費貸付事業費（長期借入金による病院整備等）、施設費交付事業費等）、学内配分における予算の確保による整備、寄附による整備などがある。

ここでは、第2次科学技術基本計画（緊急整備5か年計画）（平成13年閣議決定）から現在の第3次科学技術基本計画（第2次緊急整備5か年計画）（平成18年閣議決定）までの、近年に整備した主な建物について紹介する。



キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

動線の現状 TRACE OF MOVEMENT

総論

桜ヶ丘キャンパスは、キャンパス南側の医科診療棟前と歯科病棟前の2つのロータリーを起点に、幹線道路が病院ゾーンと教育研究ゾーンを囲むように環状に配置されている。

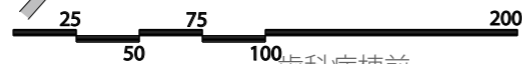
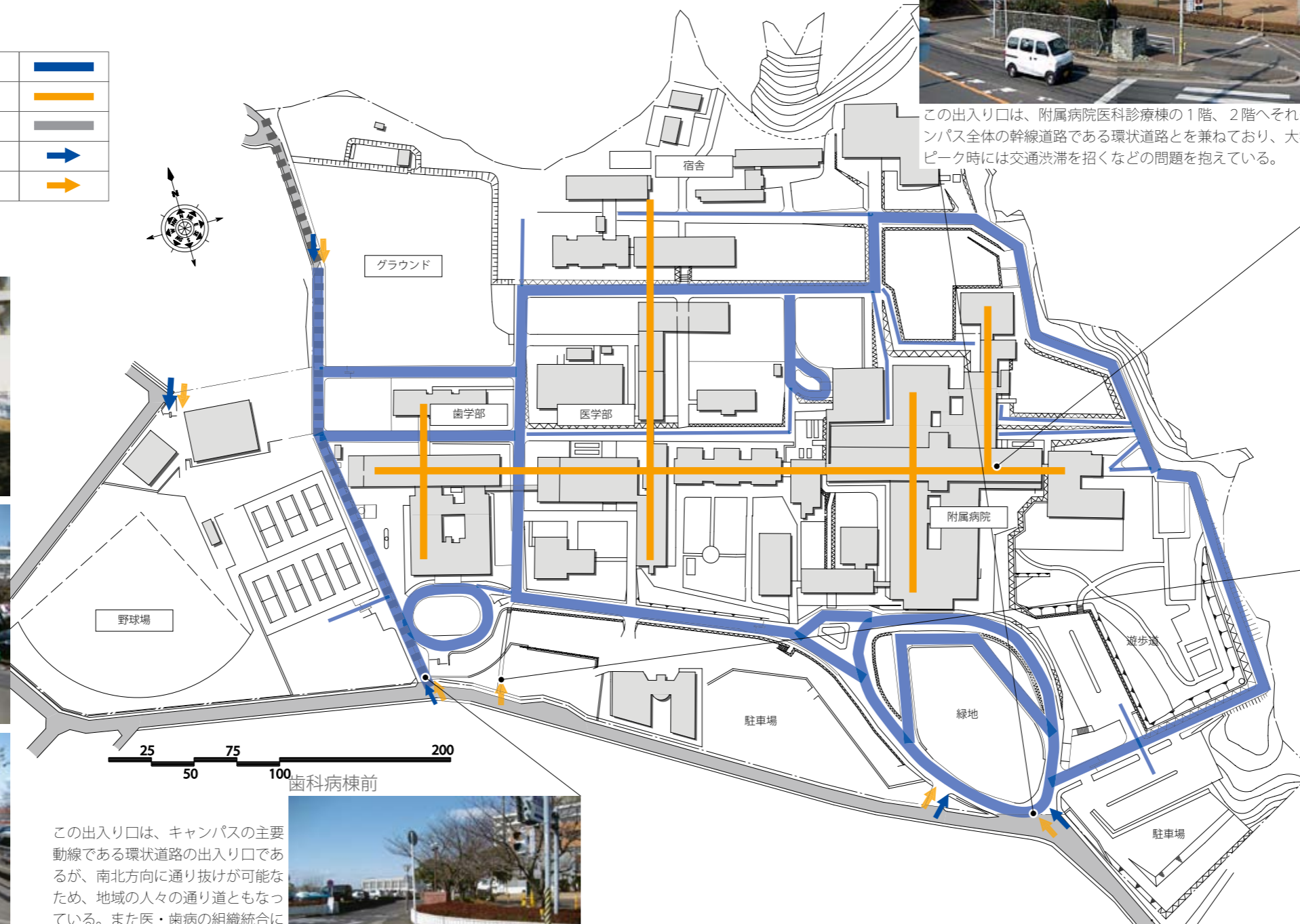
医・歯病の組織統合や病院再開発事業等に伴って、附属病院だけでなく、キャンパス全体としても、教育研究施設との連携・協力ができ、その発展を促すことができるような一体的な動線の計画をしていかなければならない。

自動車動線	
歩行者動線	
市道	
自動車入口	
歩行者入口	

道路のハード面について



主要動線の大部分はアスファルトで舗装されている。道路幅が狭く離合しにくい等、整備が必要な箇所が多々存在している。



駐車場・駐輪場の現状

PARKING LOT & BICYCLE PARKING LOT

総論

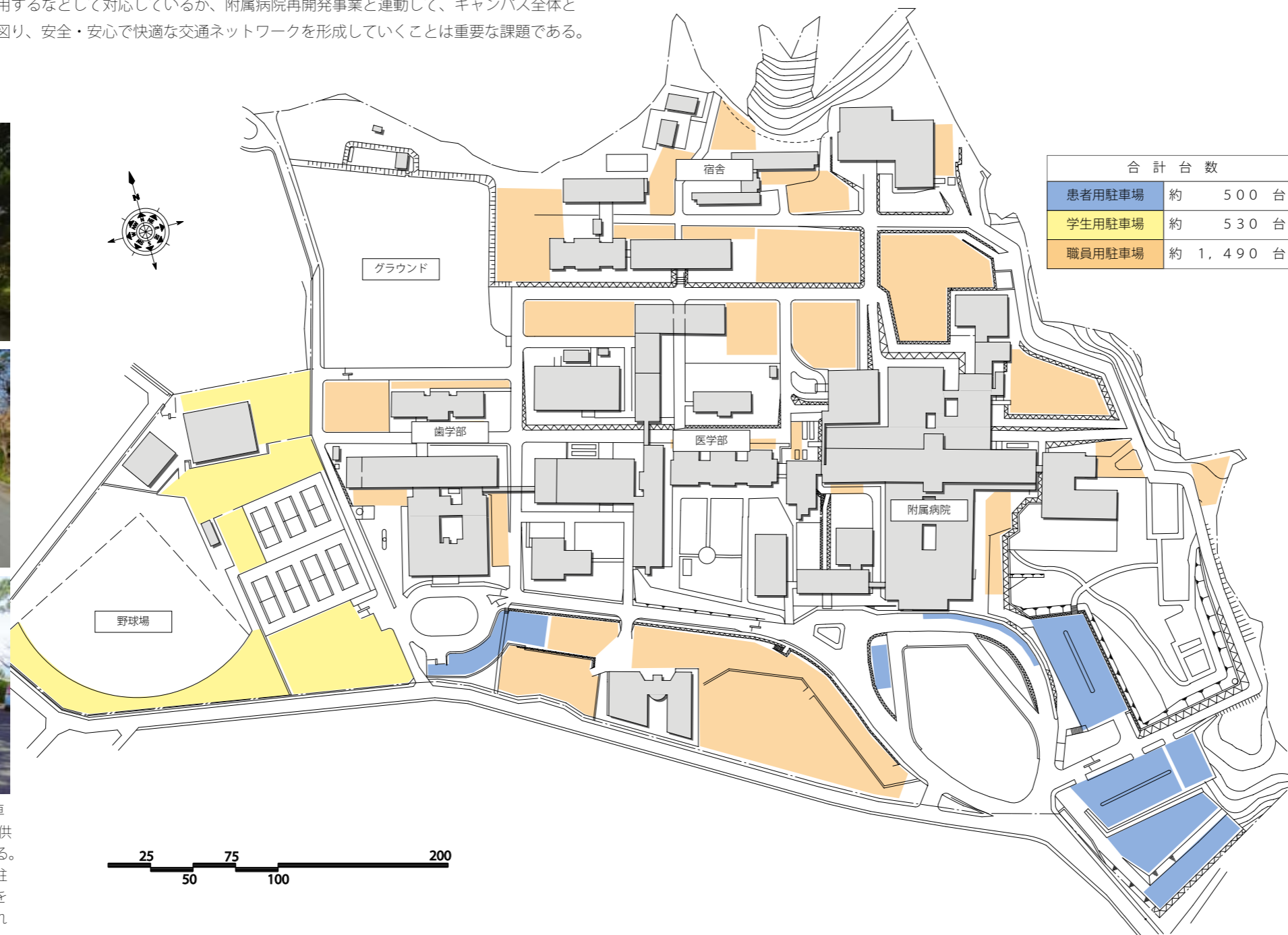
桜ヶ丘キャンパスは丘陵地のため、自転車の利用は少ないが、車やバイクの利用は多い。駐輪・駐車場ともに、非効率な分散化等の問題がある。また、駐車場については従来からの約 100 台の不足に加え、平成 19 年度から着手した附属病院再開発事業等により、約 250 台のさらなる不足の発生が考えられる。

現在、運動場をやむなく駐車場に転用するなどして対応しているが、附属病院再開発事業と連動して、キャンパス全体として、緑地資源・屋外環境等の調和を図り、安全・安心で快適な交通ネットワークを形成していくことは重要な課題である。

駐車場



桜ヶ丘キャンパスは、現在約 2,520 台の駐車スペースがあるが、需要に対して約 96%の供給であり、約 100 台不足している状況である。路上駐車や、緑地やオープンスペースへの駐車等により、屋外空間のアメニティーの質を下げている。これらは需給のバランスの乱れだけでなく、駐車場と緑地・オープンスペースとの区別の曖昧さ、駐車場への分かりやすい誘導や機能的な配置等がなされていないことも要因の 1 つとなっている。



合計台数	
患者用駐車場	約 500 台
学生用駐車場	約 530 台
職員用駐車場	約 1,490 台

駐輪場



桜ヶ丘キャンパスは丘陵地のため、自転車の利用はほとんど無く、バイク・自転車兼用の駐輪場となっており、そのほとんどがバイクの駐輪である。経年劣化やアクセスのしづらさ等、需給のバランスだけでなく、配置・形態等も指定場所以外の駐輪を引き起こす要因の 1 つとなっている。

緑地資源・屋外環境の現状

NATURAL ENVIRONMENT
AND EXTERIOR ENVIRONMENT

総論

桜ヶ丘キャンパスの隣棟間や中庭等の外部空間は、それらが良質なアメニティーを形成しているとは言い難く、また、サイン・ファニチャー・照明設備等も統一性・審美性に乏しく、良好な景観を形成しているとは言い難い状況にある。

平成19年度より着手した附属病院再開発事業と連動し、空間の特性・ニーズ、緑地資源・内部空間との関係性等を踏まえ、学生・教職員・地域住民・患者等の憩い・交流の場としての機能を高め、個々の空間を良質なものにしていくことはもちろん、個々の空間が有機的に連携する魅力的で豊かな屋外環境となるべく、ランドスケープデザインを行っていく必要がある。

サークル棟東側



サークル棟に向かうこの歩道は桜並木となっているが、周りを手入れのされていない木々に囲まれ、暗い印象の空間となっている。

保健学科研究棟南側桜並木



保健学科研究棟の南側は桜並木となっており、春にはキャンパスに潤いを与えている。

福利厚生施設周辺



この空間は、木々に囲まれ、食堂・売店等の福利厚生施設が隣接し、交流・憩いの空間としてポテンシャルの高い空間であるが、ファニチャーもなく、アクセスが限定的になっており、人が憩う姿は見えない。

キャンパスサイン

附属病院再開発事業に併せてサイン整備計画を策定し、郡元キャンパスと同様、全学的な整備を進めていく必要がある。

附属病院東側遊歩道



附属病院東側のこの空間は、患者用の遊歩道となっており、維持管理がなされ、広い範囲にわたり、親緑性の高い空間となっている。

図書館西側



この空間は、講義・研究棟、図書館に隣接しており、学生の交流・憩いの場として賑わう空間である。緑地も手入れがなされ、ファニチャーも充実し、また隣接する建物の1階部分のピロティと連続性を持つよう一体的に整備されている。

病院南側緑地帯



附属病院の玄関口にあたるこの緑地帯は、ワシントンヤシに囲まれた芝生広場となっており、維持管理がいき届き、美しく整備されている。しかし、鑑賞用としての機能しか持たず、広い空間であるにも関わらず、憩い・交流・散策等を行うことは少ない。



ゾーニング計画 ZONING PLAN

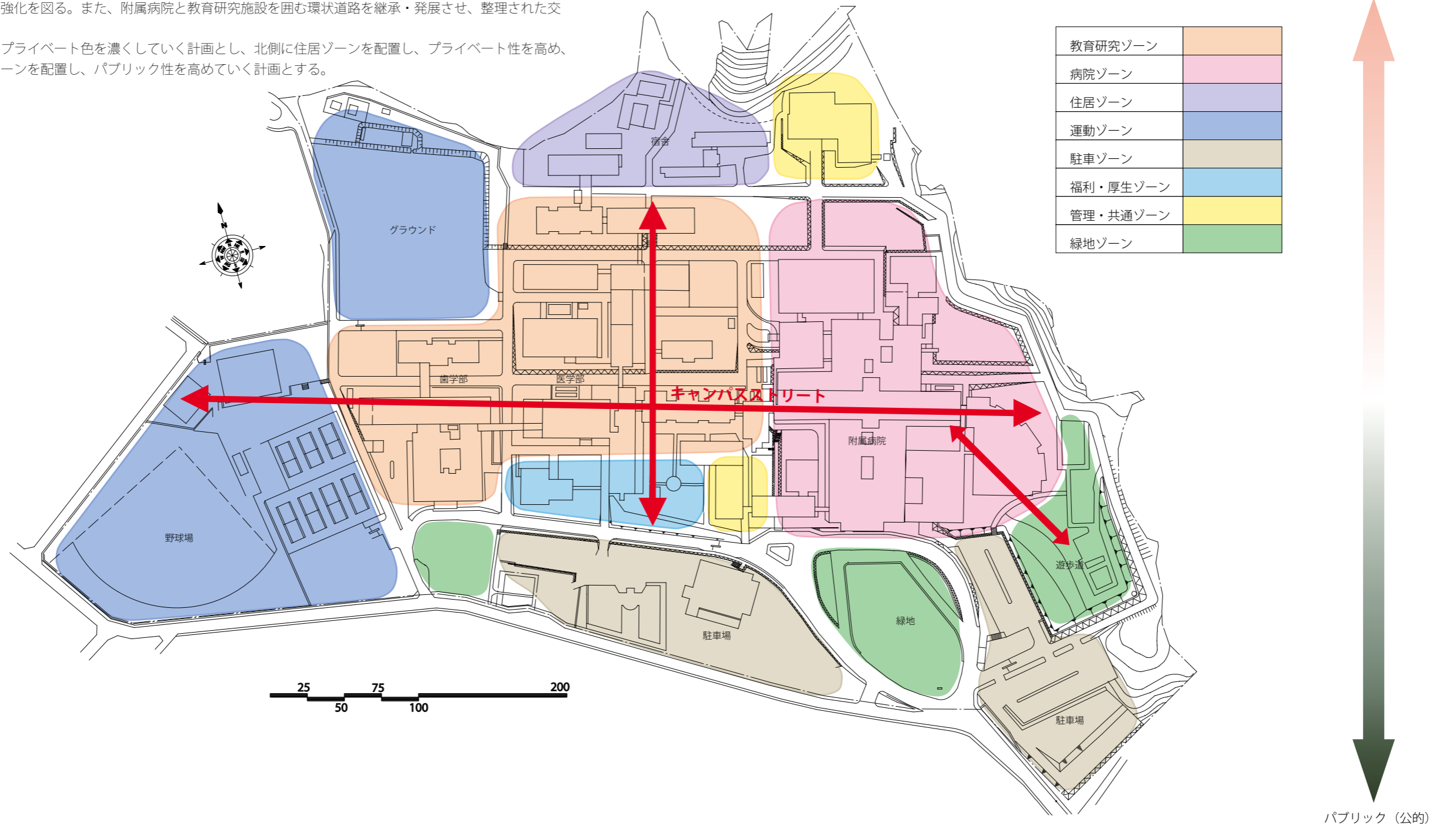
総論

ゾーニングについては、既存の配置を継承しつつ、各ゾーンの現状・発展性・機能性を考慮し、各ゾーンの連携を図る計画とする。

医・歯病の組織統合に伴う歯病の移転により病院機能を集約し、敷地西側から東側にかけて順に、運動ゾーン、教育研究ゾーン、病院ゾーンとし、各ゾーンの集約化を図る。敷地の中心に福利厚生ゾーンを配置し、主要な憩い・交流の場となるよう計画する。

病院と教育研究施設を結ぶ動線をキャンパスストリートと位置づけ、キャンパスストリートを中心とした整備を行い、教育研究施設と附属病院の連携強化を図る。また、附属病院と教育研究施設を囲む環状道路を継承・発展させ、整理された交通体系を整備する。

敷地南側から北側にかけてプライベート性を高くしていく計画とし、北側に住居ゾーンを配置し、プライベート性を高め、南側は駐車場ゾーン、緑地ゾーンを配置し、パブリック性を高めていく計画とする。



キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

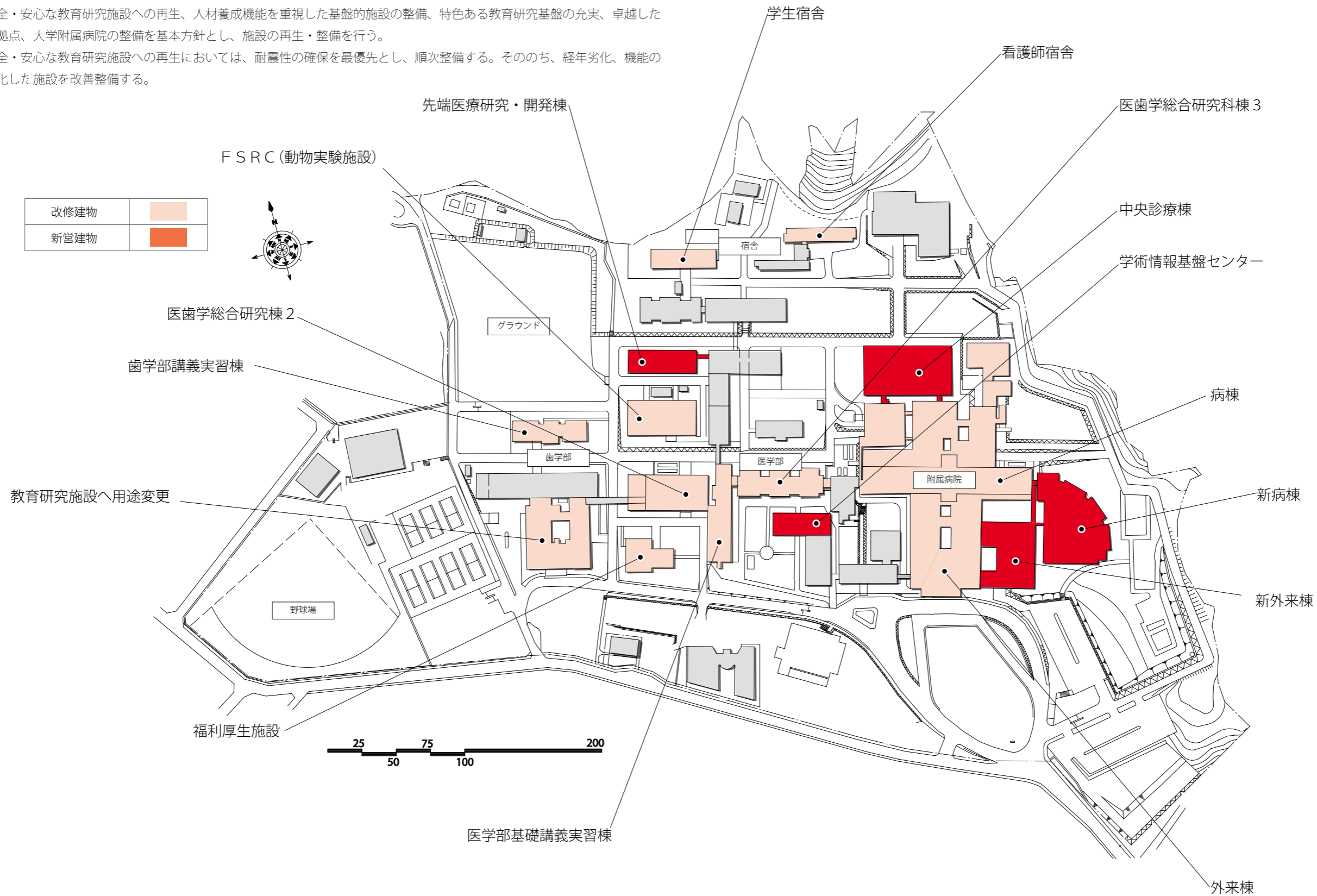
キャンパス計画

施設整備計画 DEVELOPMENT PLAN

総論

安全・安心な教育研究施設への再生、人材養成機能を重視した基盤的施設の整備、特色ある教育研究基盤の充実、卓越した研究拠点、大学附属病院の整備を基本方針とし、施設の再生・整備を行う。

安全・安心な教育研究施設への再生においては、耐震性の確保を最優先とし、順次整備する。そののち、経年劣化、機能の陳腐化した施設を改善整備する。



動線計画 TRACE OF MOVEMENT PLAN

総論

動線については、教育研究活性化、病院機能強化、教育研究施設と病院の連携強化をすべく、安全・安心で円滑な移動を促す計画とする。東西方向に、基軸となるキャンパスストリートを設定し、教育研究施設と病院を連結する重要な歩行者動線と位置付け、これを中心とした整備を行い、教育研究施設と病院の連携強化を図る。

また、病院と教育研究施設を囲む、自動車主要動線である環状道路を継承・発展させ、歩行者と自動車の棲み分けを推進する。出入口については、外部・内部との関係性等を考慮し、公共交通機関等との接続性を高め、周辺地域も含めた、円滑な移動を促す計画とする。

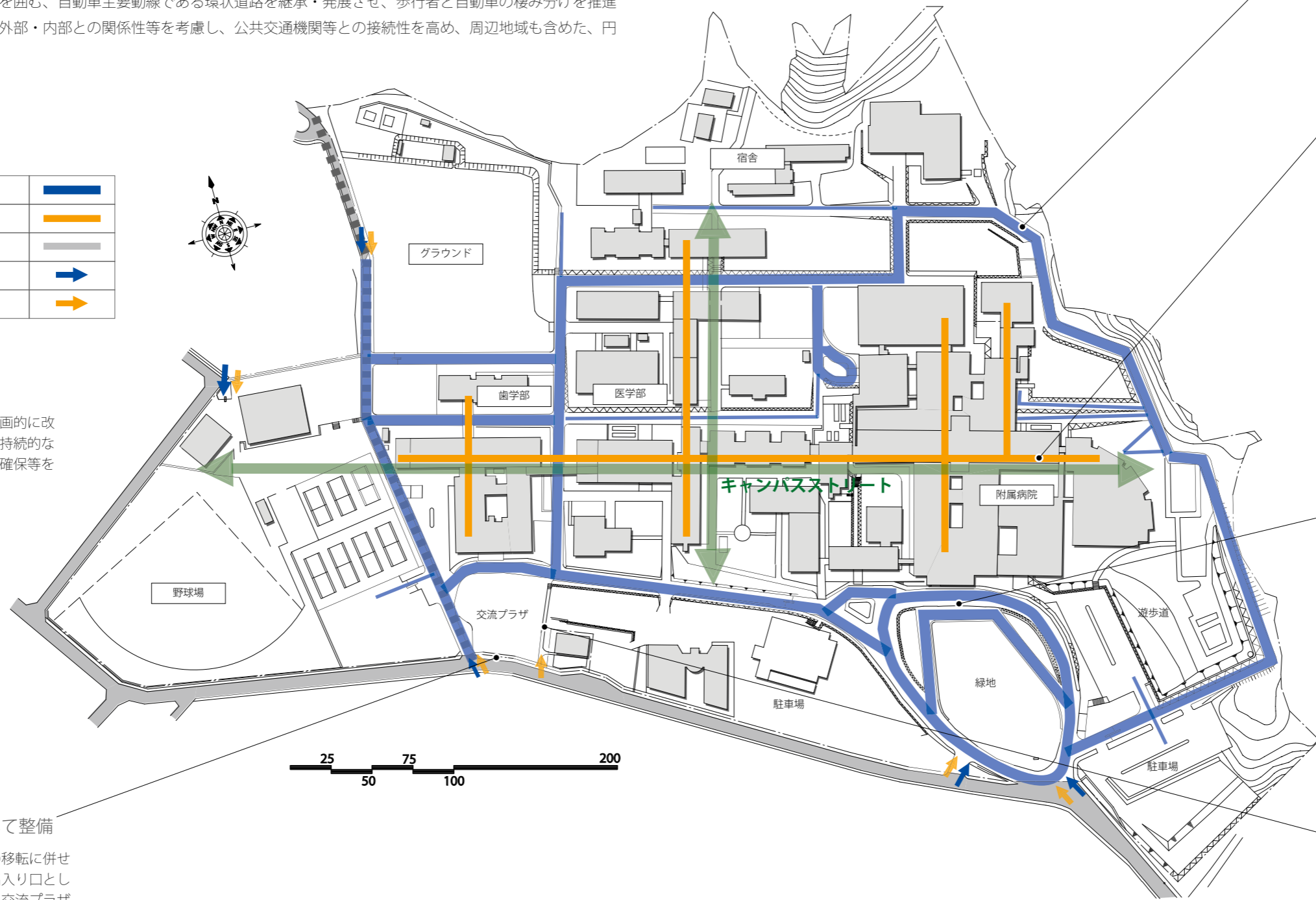
自動車動線	
歩行者動線	
市道	
自動車入口	
歩行者入口	

道路のハード面について

危険箇所・問題点を抽出し、計画的に改善を図っていく。そのためには、持続的な管理・運営を支援するための財源確保等を図る必要がある。

教育研究ゾーン出入口として整備

医・歯病の組織統合に伴う歯病の移転に併せて、教育研究施設ゾーンの主要出入口として整備する。南側の視界を開き、交流プラザに一般市民も訪れやすい動線計画とする。保育所が隣接しているため、防犯対策も考慮する。



環状道路

病院と大学を囲む、車両主要動線である環状道路を継承・発展させ、歩行者と車両の棲み分けを推進する。

キャンパスストリート

基軸となるキャンパスストリートを設定し、教育研究施設と病院を連結する重要な歩行者動線と位置付け、これを中心とした整備を行い、教育研究施設と病院の連携強化を図る。また、各建物間が渡り廊下で接続されている現状を継承・発展する。屋外についても各所にある緑地・屋外広場と一体的に整備する。

周辺緑地との調和

医科診療棟玄関から近隣の緑地へのアクセスを容易にする動線計画とする。

バス停前歩行者専用道

現状のロータリーを交流プラザとして整備する等、駐車場の横断による事故の危険性を伴わない動線計画とする。また、保育所へ通じる動線であるため、防犯対策を特に考慮した動線計画とする。

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

駐車場・駐輪場計画 PARKING LOT & BICYCLE PARKING LOT PLAN

総論

環境保全への認識のもと、基本的には公共交通機関の利用を促す計画とする。教育研究の進展、附属病院再開発事業の進展、周辺交通事情（バス・市電）の変化に対応し、さらには屋外環境・緑地資源等との調和を図り、安全・安心で快適な交通環境を支える計画とする。

また、良好な交通環境を持続的に維持するための財源の確保等を図る。

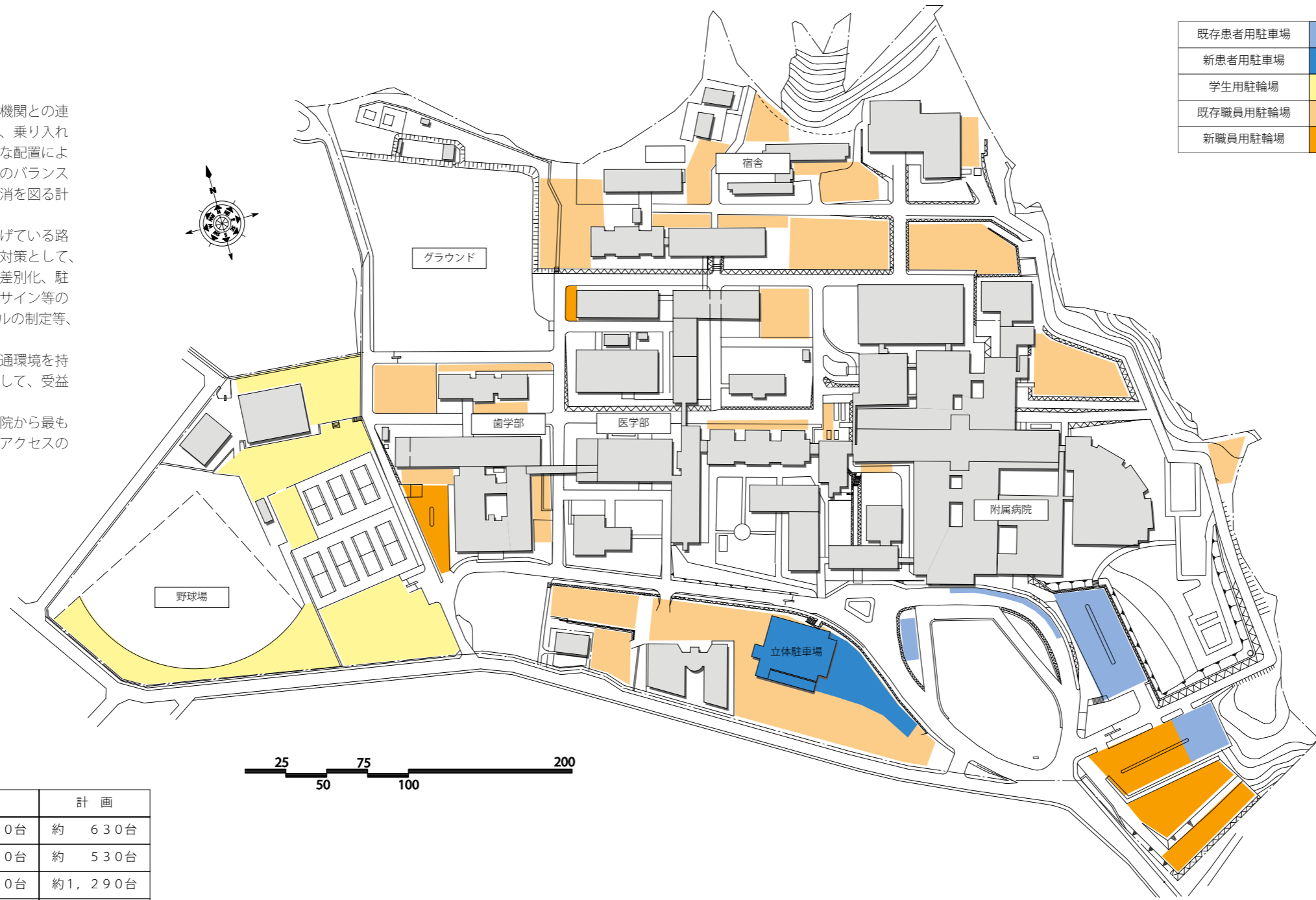
駐車場

入構許可証発行の制限、公共交通機関との連携による公共交通の充実等により、乗り入れ台数を減少させることと、機能的な配置によりキャンパス内の各エリアの需給のバランスを整えることで、駐車場不足の解消を図る計画とする。

屋外環境のアメニティの質を下げている路上駐車や緑地・屋外広場への駐車対策として、緑地・屋外広場と駐車場の明確な差別化、駐車場までのスムーズな誘導を促すサイン等の整備を図る。また、全学的なルールの制定等、一定の規制も必要である。

これらの計画を実現し、良好な交通環境を持続的に維持するための財源確保として、受益者負担等が考えられる。

また、患者用駐車場については病院から最も近い駐車場に集約し、病院までのアクセスの短縮を図る計画とする。



駐輪場

屋外環境のアメニティの質を下げている、路上駐輪や緑地・屋外広場への駐輪対策として、キャンパス全体における駐輪場の機能的な配置、歩行者アプローチに隣接した駐輪場の配置、緑地・屋外広場と駐輪場の明確な差別化、駐輪場までのスムーズな誘導を促すサイン等の整備を図る。また、全学的なルールの制定等、一定の規制も必要である。

合計台数	現状	計画
患者用駐車場	約 500台	約 630台
学生用駐輪場	約 530台	約 530台
職員用駐輪場	約1,490台	約1,290台
合計	約2,520台	約2,450台

緑地資源・屋外環境計画

NATURAL ENVIRONMENT PLAN
AND EXTERIOR ENVIRONMENT PLAN

総論

それぞれの外部空間の特性・ニーズ、緑地資源・内部空間との関係性等を踏まえ、特色ある整備を行う計画とする。キャンパスストリートの中央に位置する福利厚生施設周辺をキャンパス中央プラザと設定し、桜ヶ丘キャンパスの憩い・交流の拠点として整備する計画とする。附属病院ゾーンでは、ホスピタルガーデンを各所に設け、患者等病院関係者の憩い・交流の場として整備する計画とする。また、サイン、外灯、ベンチ、ゴミ箱等のデザインの方角性を確立し、統一を図り、調和のとれたキャンパスを演出する。胸像・慰霊碑・記念樹等の歴史的資源も考慮し、一体的に整備する。

課外活動プラザ

サークル棟に至る桜並木を中心に現状の殺伐とした樹木を整理し、学生の課外活動を活性化するような仕掛けを施し、緑と賑わいのあふれる、学生の憩い・交流の場に整備する計画とする。

キャンパス中央プラザ

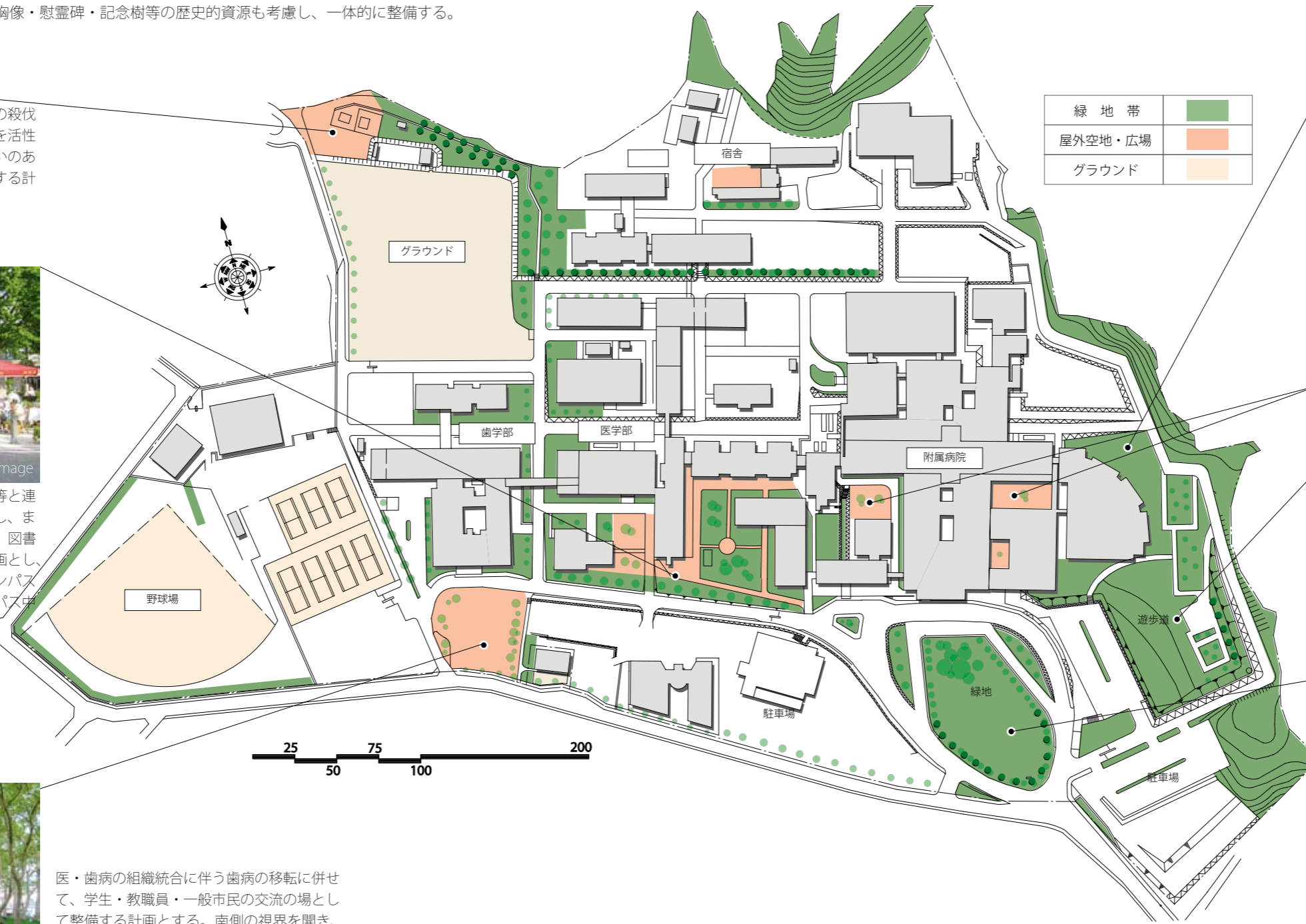


福利厚生施設周辺緑地を、食堂・売店等と連続性をもったカフェテラスとして整備し、また東側建物の1階ピロティ部を通して、図書館西側広場まで視界が抜けるような計画とし、これらと一体的に整備し、桜ヶ丘キャンパスの憩い・交流の場の拠点となるキャンパス中央プラザとして整備する計画とする。

交流プラザ



医・歯病の組織統合に伴う歯病の移転に併せて、学生・教職員・一般市民の交流の場として整備する計画とする。南側の視界を開き、一般市民も訪れやすい、親しみやすい空間を演出する。また、保育所が隣接しているため、防犯対策も考慮した計画とする。



新病棟前庭



前庭の整備を行い、病室から緑地と桜島を眺望できる計画とする。

ホスピタルガーデン



患者等病院関係者が安らぐことのできる癒しの空間としてホスピタルガーデンを各所に整備する計画とする。

遊歩道

現状の遊歩道の機能を、継承・発展させていく計画とする。新病棟や新外来棟との関係を密なものとし、駐車の排除、ファニチャー等の充実等の利用を促す仕掛けを施し、患者等病院関係者の心を癒す散策系の緑地として整備する計画とする。

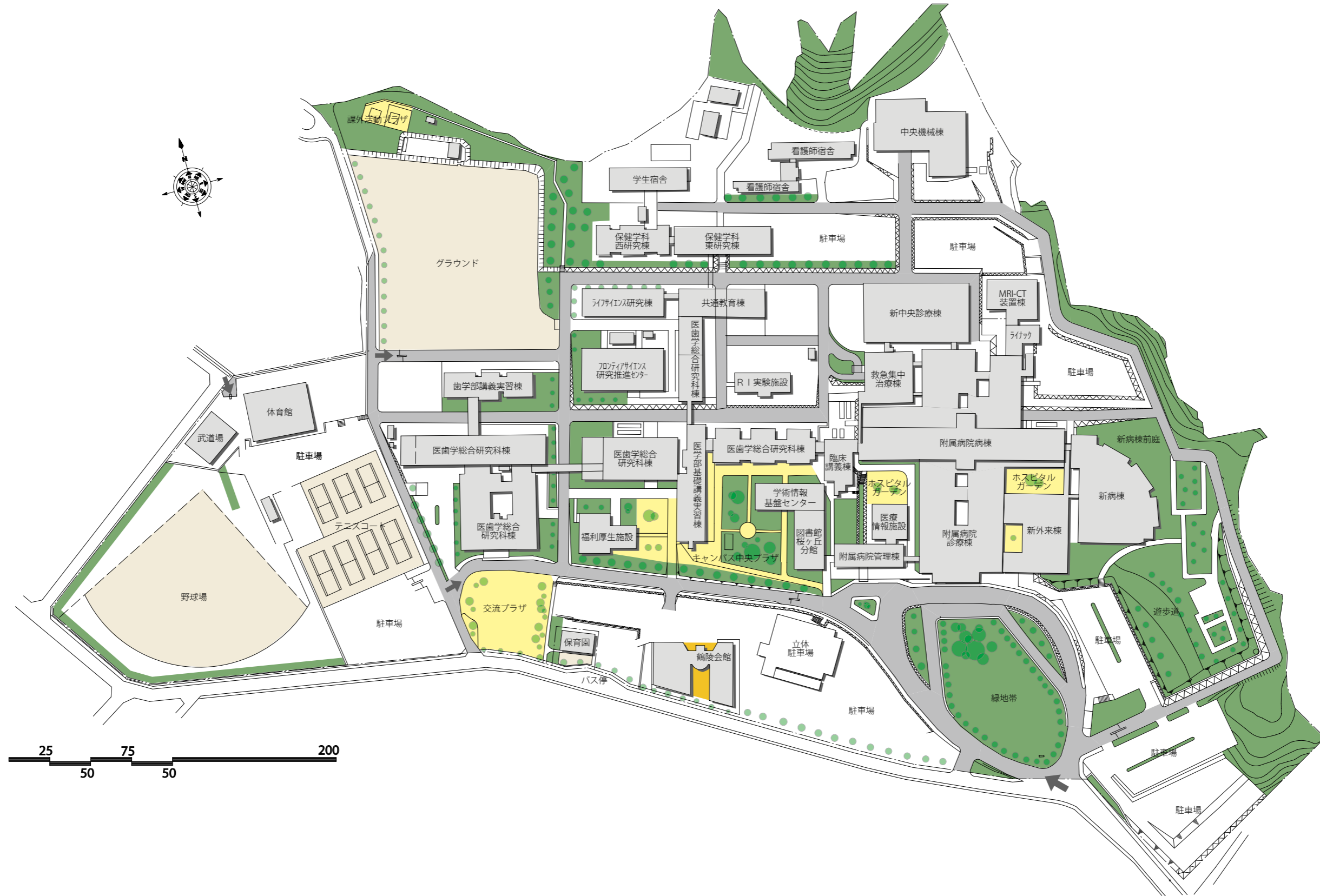
病院南側緑地帯



現状では立ち入ることが難しく、観賞用の機能しか待たないが、患者等病院関係者が芝生広場でくつろぐ事のできるような、憩い・交流系の緑地としての転換を視野に入れ、継承していく計画とする。

将来構想配置図

PLAN ARRANGEMENT CHART IN THE FUTURE



キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

下荒田キャンパス OUTLINE OF SHIMOARATA CAMPUS

下荒田キャンパス概要 -平成 19 年 5 月現在-

- 設置年度：昭和 24 年
- 敷地面積：52,097 m²
- 建築面積：6,486 m²
- 延面積：16,866 m²
- 都市計画区域：都市計画区域内 市街化区域
- 防火地域：-
- 用途地域：第 1 種住居地域、近隣商業地域
- 日影規制：5 - 3 時間
- 都市計画施設：水道、下水道等供給施設又は処理施設
- その他の地域：宅地造成工事規制区域
公害防止地域
(大気汚染、騒音、水質汚濁)
- 地震地域係数：3 種
- 地盤種別：2 種
- 積雪寒冷地域：その他

下荒田キャンパスの位置付け

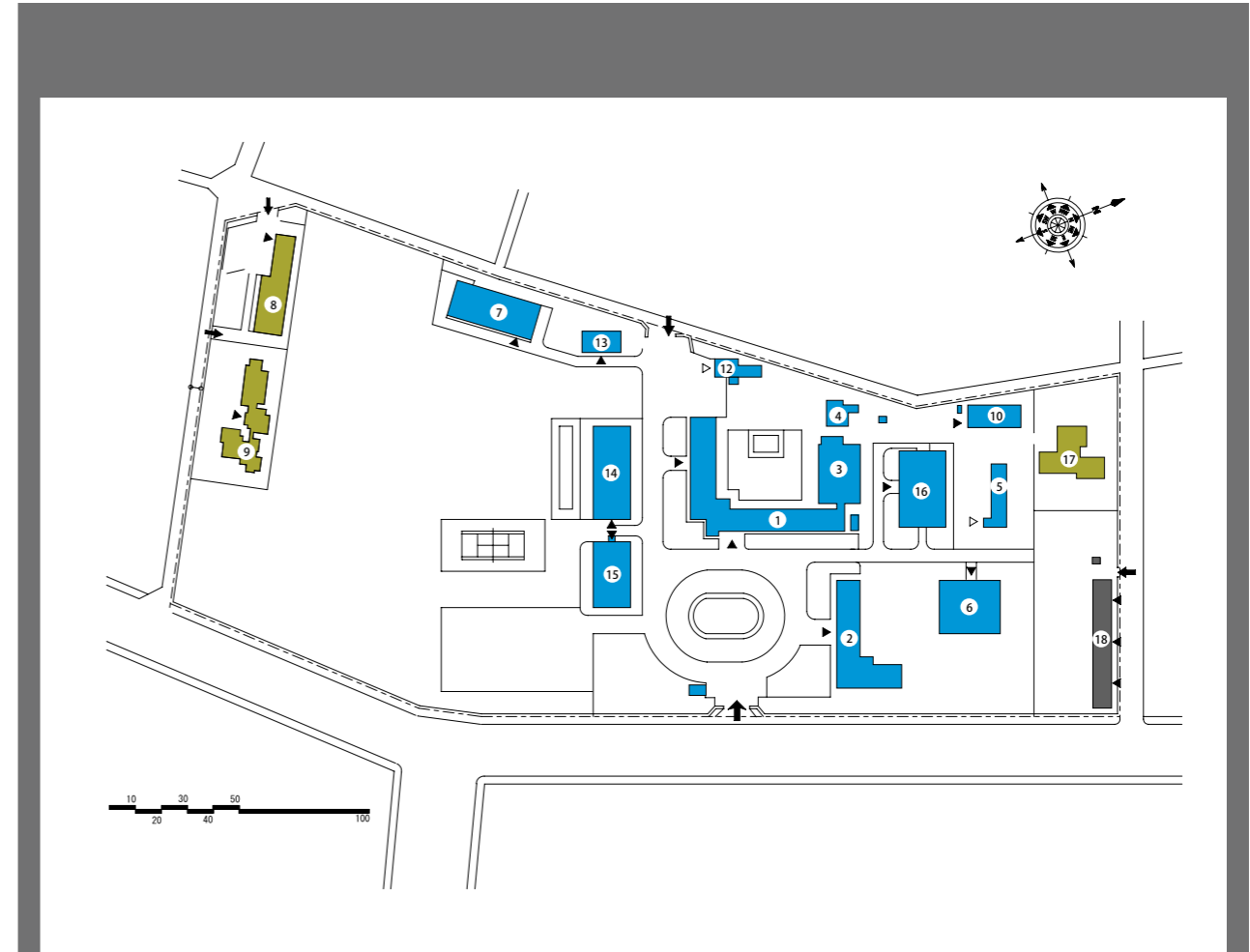
下荒田キャンパスは、郡元キャンパス（メインキャンパス）、桜ヶ丘キャンパス（医・歯学部、病院等）と並び、鹿児島大学の主要 3 キャンパスの 1 つである。

本キャンパスは、水産学部と国際交流会館が立地するが、主に水産学部専門課程及び大学院水産学研究科の教育研究が行われている、やや特化した地区である。本学の水圏及び臨海域における教育研究機能と国際交流会館を軸とする国際化の一躍を担う。

平成 20 年 2 月撮影



下荒田キャンパス配置図

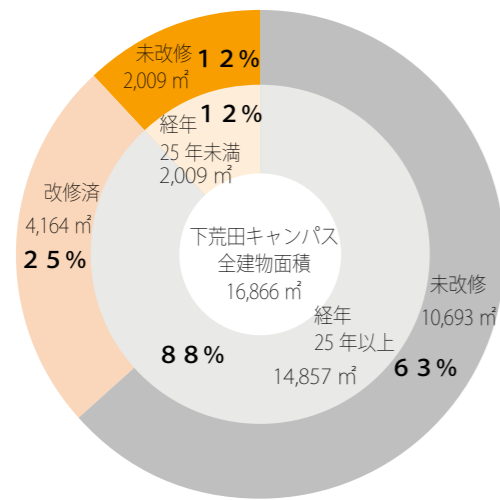


水産学部		宿泊施設	職員宿舎
1 管理・研究棟	14 資源育成科学棟	8 国際交流会館（1号館）	18 職員宿舎
2 資源利用科学棟	15 附属図書館水産学部分館	9 国際交流会館（2号館）	
3 管理・研究棟（4F 講義室）	16 講義棟	17 外国人研究者宿泊施設	
4 変電棟			
5 サークル棟			
6 資源利用科学実習棟			
7 福利厚生棟 附属海洋資源環境教育研究センター			
10 大型回流水槽実験棟			
12 車庫・倉庫			
13 実験・実習棟			

施設の現状 THE CURRENT FACILITIES OF SHIMOARATA CAMPUS

老朽化の現状 -平成 19 年 5 月現在-

下荒田キャンパスの全建物面積 16,866 m²のうち、経年 25 年以上の建物面積が 14,857 m²であり、約 88%を占めている。
これらの経年 25 年以上の建物のうち、未改修の建物面積は 10,693 m²であり全建物面積の約 63%となっている。
教育研究基盤施設の再生に向け、今後もこれらの老朽施設の再生は重要な課題である。



経年 25 年以上	未改修	■ (グレー)
	改修済	■ (オレンジ)
経年 25 年未満	未改修	■ (オレンジ)
	改修済	なし



施設の現状 THE CURRENT FACILITIES OF SHIMOARATA CAMPUS

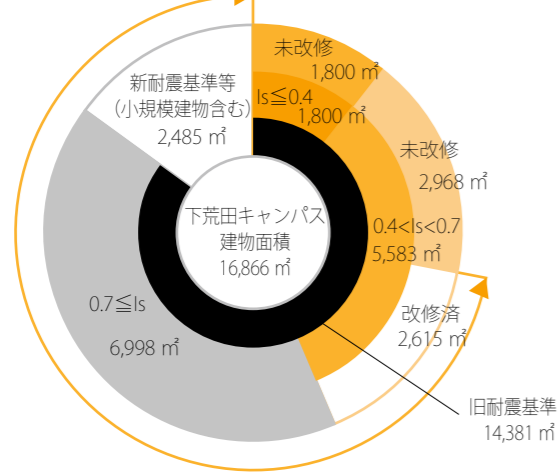
耐震化の現状 -平成20年3月現在-

下荒田キャンパスの建物面積は16,866㎡であり、そのうち旧耐震基準で整備された建物面積が14,381㎡であり、下荒田キャンパス全体の約85%を占めている。

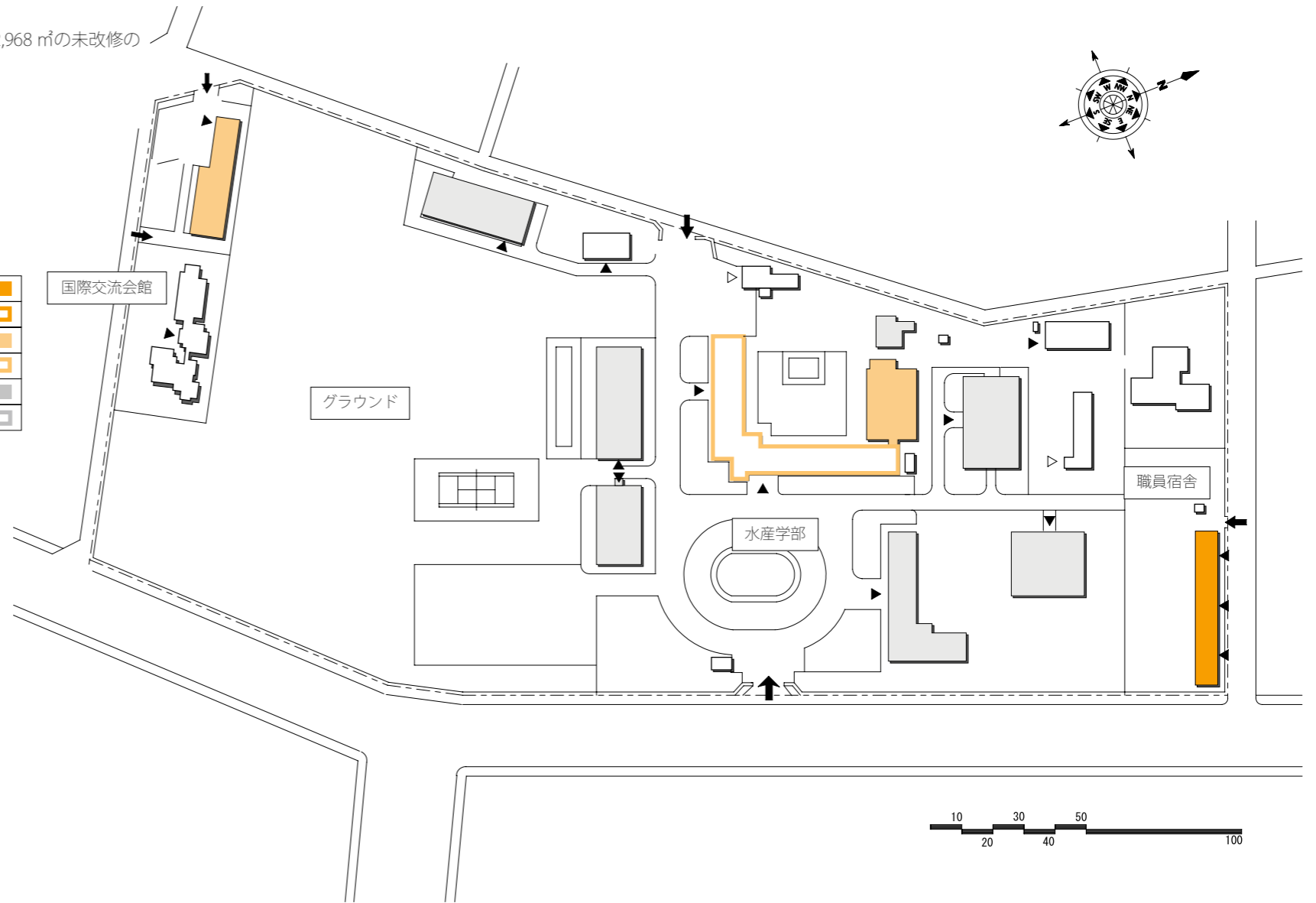
1s ≤ 0.4の建物面積は1,800㎡、0.4 < 1s < 0.7の建物面積は5,583㎡であり、それぞれ1,800㎡、2,968㎡の未改修の建物面積を残しているのが現状である。

下荒田キャンパスの耐震化率は約7.2%であり、引き続き耐震安全性の確保は緊急な課題である。

耐震化率約7.2%



耐震基準	1s ≤ 0.4		0.4 < 1s < 0.7		0.7 ≤ 1s	
	未改修	改修済	未改修	改修済	未改修	改修済
旧耐震基準	1,800㎡	1,800㎡	2,968㎡	2,615㎡	0㎡	0㎡
新耐震基準等 (小規模建物含む)	0㎡	0㎡	0㎡	0㎡	6,998㎡	6,998㎡



構造耐震指標 (1s値) とは？

建築物の耐震診断で用いられる数値で1981年以前の旧耐震基準の建物の耐震性能を判定するために考案されたもの。

- 1s ≤ 0.3・・・大規模地震で倒壊の危険性が高い
- 0.3 < 1s < 0.6・・・危険性がある
- 0.6 ≤ 1s・・・危険性が低い

※文部科学省は学校建築ではより安全に0.3を0.4、0.6を0.7に置き換えている。

狭隘化の現状 -平成19年5月現在-

下荒田キャンパスは、郡元キャンパスと共に広義の郡元地区を形成しているため、大学図書館、大学体育施設、大学支援施設、大学管理施設等について、下荒田キャンパス単体での考察はし難い。

考察可能な大学教育・研究施設については、82.3%となっている。必要諸室の見直し、講義室の稼働率の向上、面積の再配分等、スペースマネジメントをより一層促進し、スペースの有効活用を図っていかなければならない。

整備率とは？・・・保有面積/必要面積で表され、整備率が低いほど狭隘度が高いことになる。

下荒田キャンパスの面積区分毎の整備率

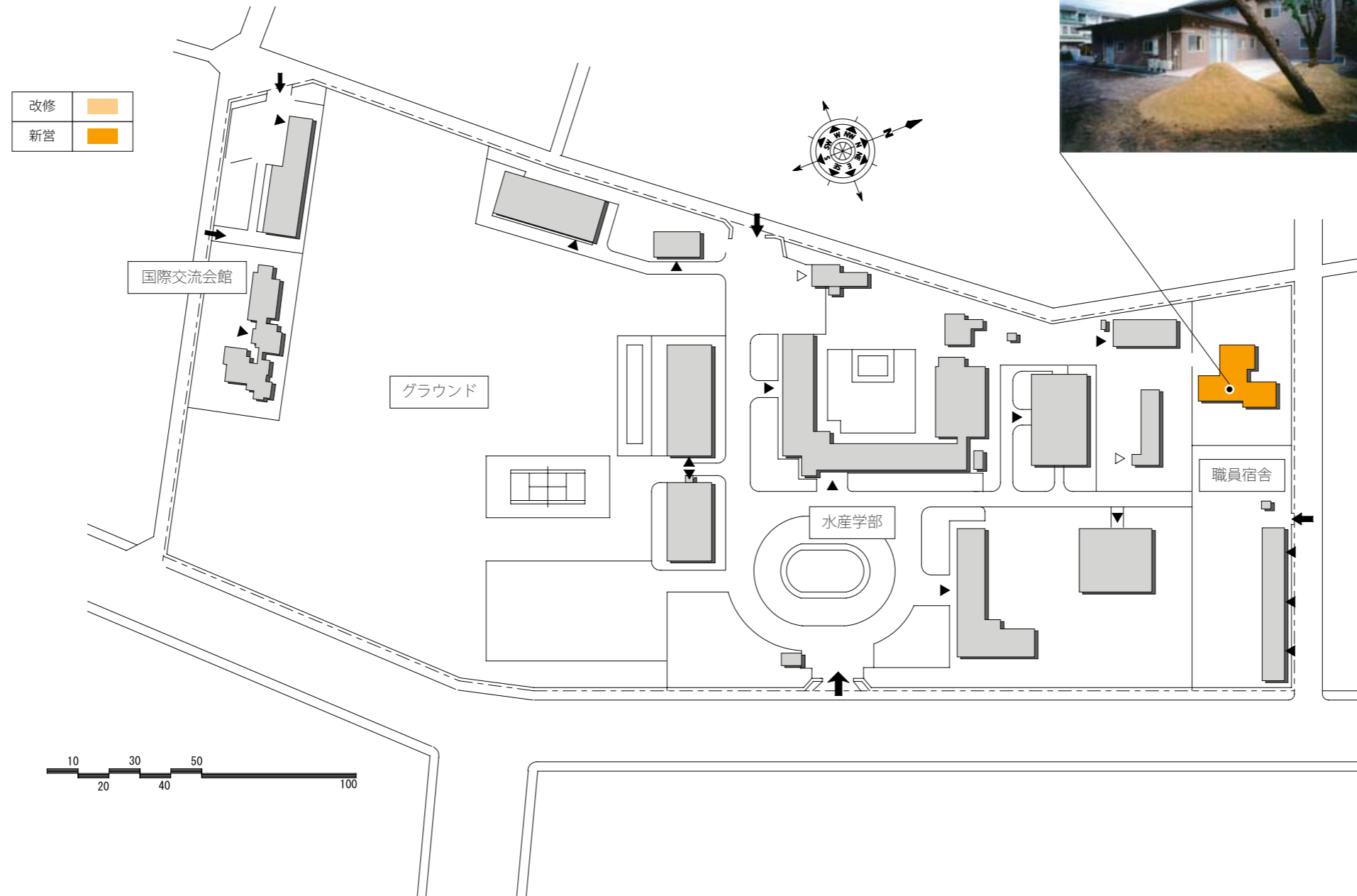
面積区分	大学教育・研究施設	大学図書館	大学体育施設	大学支援施設	大学宿泊施設	大学管理施設
必要面積 (㎡)	12,362	1,582	1,460	1,070	4,544	969
保有面積 (㎡)	10,175	856	0	566	4,988	19
整備率 (%)	82.3%	54.1%	0.0%	52.9%	109.8%	2.0%

施設の現状 THE CURRENT FACILITIES OF SHIMOARATA CAMPUS

整備状況

施設整備の主な手法として、国への概算要求に基づく予算確保による整備（施設整備費補助金、施設費交付事業費等）、学内配分における予算の確保による整備、寄附による整備などがある。

ここでは、第2次科学技術基本計画（緊急整備5か年計画）（平成13年閣議決定）から現在の第3次科学技術基本計画（第2次緊急整備5か年計画）（平成18年閣議決定）までの、近年に整備した主な建物について紹介する。



新営：外国人研究者宿泊施設



大学の国際化の推進

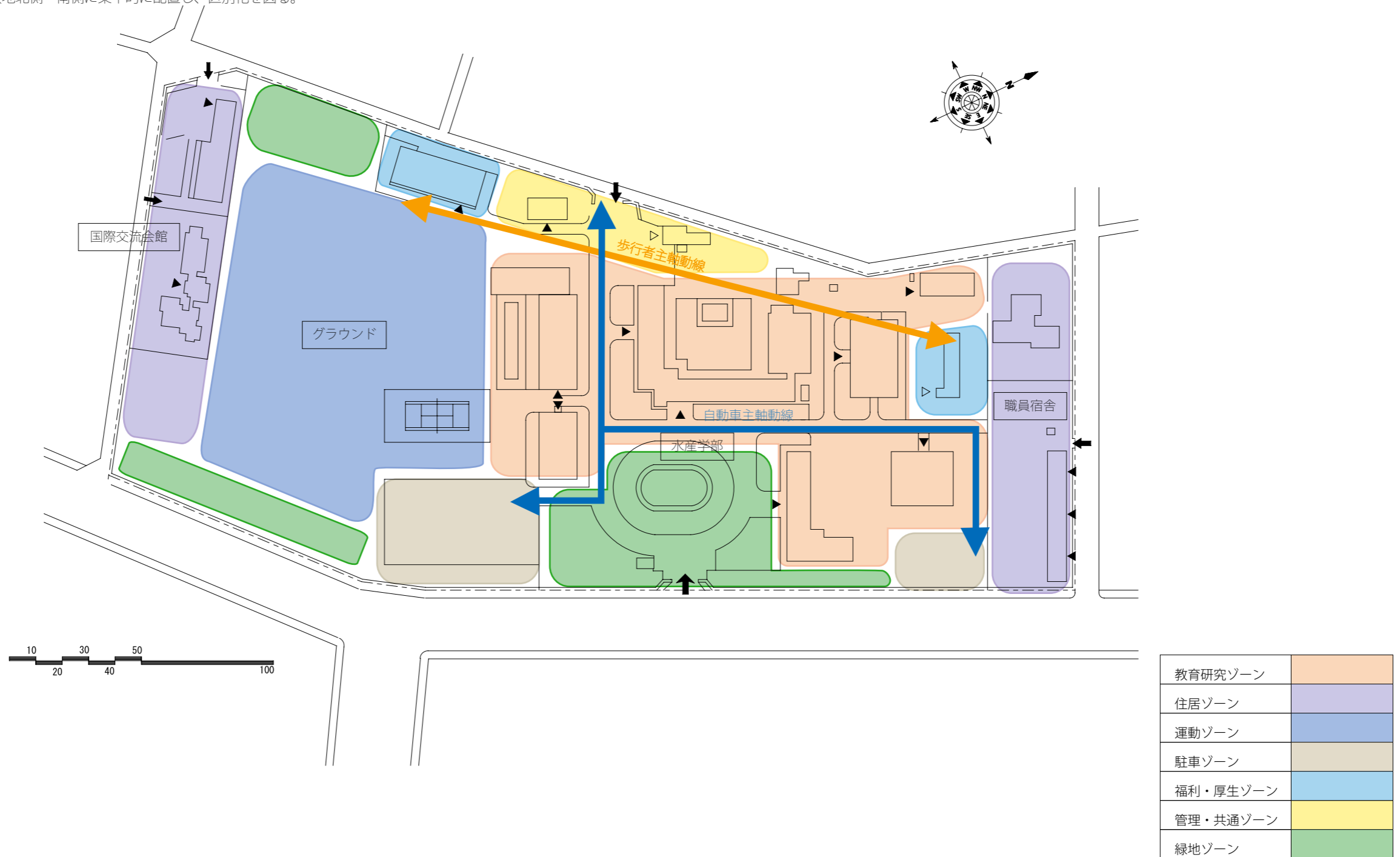
ゾーニング計画 ZONING PLAN

総論

ゾーニングについては、既存の配置を継承しつつ、各ゾーンの現状・発展性・機能性を考慮し、各ゾーンの連携を図る計画とする。

敷地南西側の福利厚生ゾーンと敷地中央部の教育研究ゾーン、敷地北側の福利厚生ゾーンを結ぶラインを歩行者の主軸動線、敷地西側の車両出入口から駐車場ゾーンを結ぶラインを自動車の主軸動線とし、歩行者動線、自動車動線の分離を図る。さらにこれを中心とした整備を行い、各ゾーンの連携を図る。

機能性の異なる住居ゾーンについては敷地北側・南側に集中的に配置し、区別化を図る。



キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

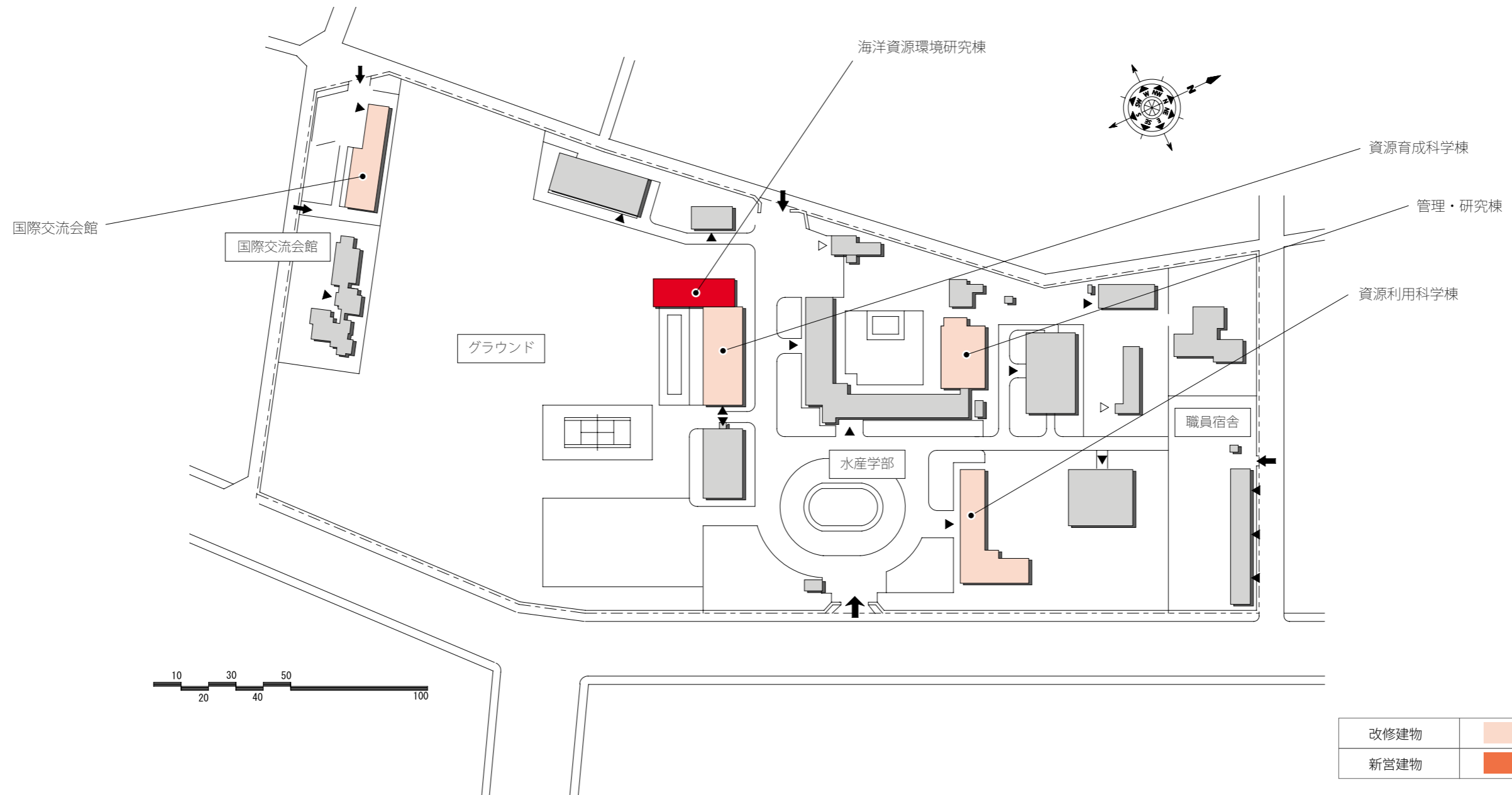
キャンパス計画

施設整備計画 DEVELOPMENT PLAN

総論

安全・安心な教育研究施設への再生、人材養成機能を重視した基盤的施設の整備、特色ある教育研究基盤の充実、卓越した研究拠点を基本方針とし、施設の再生・整備を行う。

安全・安心な教育研究施設への再生においては、耐震性の確保を最優先とし、順次整備する。そののち、経年劣化、機能の陳腐化した施設を改善整備する。



将来構想配置図

PLAN ARRANGEMENT CHART IN THE FUTURE



キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

下伊敷キャンパス OUTLINE OF SHIMOISHIKI CAMPUS

牧園キャンパス OUTLINE OF MAKIZONO CAMPUS

下伊敷キャンパス概要 -平成19年5月現在-

設置年度：昭和56年
敷地面積：16,776㎡
建築面積：2,805㎡
延面積：3,538㎡
都市計画区域：都市計画区域内 市街化区域
防火地域：-
用途地域：第2種中高層住居専用地域
日影規制：4-2.5時間
都市計画施設：水道、下水道等供給施設又は処理施設
その他の地域：公害防止地域
(大気汚染、騒音、水質汚濁)
地震地域係数：3種
地盤種別：2種
積雪寒冷地域：その他

下伊敷キャンパスの位置付け

下伊敷キャンパスは、教育学部附属特別支援学校が立地しており、教育研究の実践の場として、教育実習並びに学校教育の理論と実践に関する研究を行い、地域の基幹校としてその理論的、実践的研究成果を社会へ還元する使命を担う。

キャンパス計画の考え方

本キャンパスの施設は、比較的新しく、すべて新耐震基準により整備されており、耐震対策は基本的に問題のないキャンパスであるが、整備後概ね25年を経過し、部分的な老朽化対策が必要となってきた。

本キャンパスの用途上不可欠なバリアフリー対策等の環境整備は、平成19年4月の学校教育法改正に伴い養護学校から特別支援学校となり、今後、より一層の充実が求められる。

平成20年2月撮影



牧園キャンパス概要 -平成19年5月現在-

設置年度：昭和24年
敷地面積：18,263㎡
建築面積：3,504㎡
延面積：5,097㎡
都市計画区域：都市計画区域内
市街化区域又は市街化調整区域以外の地域
防火地域：-
用途地域：-
日影規制：-
都市計画施設：-
その他の地域：地すべり防止区域
砂防法第2条において指定する土地
地震地域係数：3種
地盤種別：2種
積雪寒冷地域：その他

牧園キャンパスの位置付け

牧園団地は、国公立大学初のリハビリテーション医学講座として、運動機能、高次脳機能、種々の合併症に関する臨床的研究・医療を行っており、温泉郷の地域性を活かした、他にない医療研究実践の場として重要な役割を担う。

キャンパス計画の考え方

本キャンパスの施設は、昭和61、62年のリハビリセンターの改築整備に引き続き、平成11年に病棟増築を整備し、さらに平成17年には、温泉による諸設備の劣化対策をはじめとする基幹設備の改修とともに機能訓練室の増築を行った。本学キャンパスのなかでも最も新しい施設の一つであり特に大きな問題はない。

看護師宿舎や職員宿舎の附属施設は昭和40年代の施設で、遠隔地という立地条件からも、今後、老朽化対策の検討が必要と思われる。

平成20年2月撮影



キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画

キャンパス形成の基本的考え方

キャンパス概要

キャンパスの現状

キャンパス計画